

# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十二年七月二十五日 印刷  
昭和四十二年八月一日発行 (毎月一日発行)  
(第二十三号)



No. 23

松江梅里追悼号

八月号

川柳塔

八月号

目次



マイペースで飲もう

アサヒ  
スタイナー

今月のことばと句帖	中島生々庵	(1)
川柳塔	(同人作品)	中島生々庵選
近詠	麻生葎乃	(17)
川傍柳初篇研究	(50)	(16)
	前田喜代人・岡崎重義・清博美・ 藤井和雄・川端柳風・故高須亜三味・ 丸十府・岡田甫	
近作柳樽	北川春巢選	(26)
秀句鑑賞	(前月号から)	後藤梅志
ああ松江文夫翁之御霊		(18)
弔辞	中島生々庵	(25)
	堀口塊人・麻生葎乃・北川春巢・ 若本多久志・西尾棗・金泉萬楽・ 川村好郎・清水白柳・菊沢小松園	
大萬川柳「辞退」入選発表	清水白柳選	(42)
戦争と川柳	(同人特集)	(36)
	小川静観堂・福井野迷路・藤本礎山	
雅号ぶつちやけばなし	小川静観堂	(61)
	見島与呂志	(62)
初歩教室	菊沢小松園	(40)
柳界展望	(薫風)	(46)
本社路郎忌句会	(庸佑)	(48)
各地柳壇	(文秋)	(59)
一路集	「海」	小林孤呂二選
	「寝言」	江国幽谷選
	「表」	工藤甲吉選

★ 編集後記

(白柳・一三夫)

疲れ  
肩こり  
食欲不振  
つかれ目  
神経痛に  
タケタ薬品

アリナミンA

題字・中島生々庵  
表紙 直原玉青

性は善なり二日酔が身構える  
照る日曇る日影絵の役に耐えて棲み  
気のひける嘘には折り目つけたがり  
ほころびた嘘の悲劇はよしたまえ

梅里君を悼む

天日昏し君の笑顔を見失い

---

## 今月のことば

◎昨年七月号の本欄に、七月という月が私にいろいろつながりのある事を書いた。路郎先生ご生存中は十日のお誕生日を川柳祭として祝い、一昨年の七日におなくなりになってからは路郎忌を営むのである。路郎忌から七日前の二日は私の誕生日に当り、その誕生日に今年梅里君を偲ぶペンを運ぶのである。

◎一昨日悲しい柩を送ったのだ。彼の思い出等は、余りにも生々しい涙におおわれてしまつて、人生無常とか、死とは、生とはとか暗

い雲がつぎつぎにつきまともって来る。

◎梅里君は死んだのだろうか。火葬場に送り届けたばかりの自分の眼をまだ疑つてみる。現実はいきびしいというけれど、ほんとうの寂しさはこれからだろうか。

◎般若心経が教える通り「すべて始まりもなく終りもない、生れも育ちも死もなく一切は空である」と観じおおせぬ凡夫の悲しみである。

◎死を憎まば生を愛すべし、存命の喜び日々に樂しまざらんや―兼行法師の言葉である。

---

中島生々庵

---

川柳塔八月号



中島生々庵選

善通寺市 岡田 拳 法

苦しみを求めるように意地を張り

負ける事覚えりやズンと楽やろな

明日があるなんとかなると年をとり

療養三年夫婦喧嘩をなつかしむ

小学一年の長男

泣かされへんかがイタズラのボスと聞き

大阪市 不二田 一三夫

仕掛けでもあるよう女涙出し

ダルマ屋は目玉を入れぬのも作り

人生の傾斜へころげまいとする

寄席(二句)

出番ごと衣裳をかえる稼ぎよう

客席と漫才して三流館

高槻市 若柳 潮花

指先に残るルージュも疲れて居

乞食そろそろ帰り仕度になる夕陽

神経を使てて半間の足拍子

素人名人会徳子氏出演

藤音頭見せ場を鐘の音が止め

岡山市 服部 十九平

寄附額で来賓リボンの色を変え

雨宿り琴の音漏れる軒を借り

都会ずれした子を出世だと思ひ

グループがふくれて主流反主流

大阪市 正本 水客

浄瑠璃寺にて

空うつす隙を水蓮のこさずに

来迎の印相 金ん色ほのぐらく  
石仏の孤独たのしむ笑みと見る  
三体あみだ微笑みかける影うごく

岡山県 浜田久米雄

もの忘れしたととしより得意がり

百姓の願ひ三年先のこと

魂胆のある口論と知つて起ち

としよりの愚痴をやめさす風呂が湧き

岡山県 直原七面山

安住の地あり 二号の膝枕

夜を羽搏く紅の色

条件を吞まれて妓逃げ出せず

内祝の品を案ずる程に癒え

青森市 工藤甲吉

有刺線ペンペン草は泣いてるよ

夕日あかあかとキヤデーもきょう終わる

むしタオルすうつとあの世へ行けそうな

冷蔵庫いつでもビールとはゆかず

香川県 三井醉夢

梅らつきよメモをたよりにつけ終り

バラの虫私を鬼と思うなよ

吉野川古い恋ありあゆを釣る

急患にゴルフ行とはよう云わず

大阪市 西出一栄

十津川ダム見学

カーブする度嬉しい肩が触れ

社員の慰安旅行に便乗して発病

旅先きの見知らぬ医者に脈あずけ

下戸の悲哀やけくそのやり場なし

おしなべて美人に見える化粧法

大阪市 石倉旅風

長谷寺の牡丹で酔わず奈良へ行き

人ざわり良すぎて頼りない笑顔

物言いが軍配通り鼻をつけ

淀屋橋東西南北撮るところ

大阪市 金井文秋

玄関のポイントに下駄箱がある

売上げが落ちて来て小銭が貯まる

我が道を行きたい足に役が付き

憎めない奴にまたもやだまされる

高槻市 傍島静馬

集金もしがない生活やなと思ひ

入院へ貸付早々見舞いに来

あじさいも田植も一と雨待ちわびる

新幹線ビュッフェで大かた来てしまい

大阪市 本多柳志

父なる神の合せ給うたのが別れ  
自分だけにある喝采と信じ込み  
どんぐりの背を比べるクラス会

島太子南米訪問

一世の目にプリンスのソフト帽

諫早市 川岡靈眼子

お上りに国会議事堂自若たり  
子の下宿訪うに土産を太く持ち  
胃の薬持つて知り合飲みあるき

林芳子(梓みちよの母)と逢う

その昔ビジネスだった声を出し

ハワイ 築山快夢起

口あけた社長の寝顔頂けず  
表彰の祝辞が痛い過去に触れ  
衣裳展夫は例の黙秘権

青い眼も日の丸を振るこの佳き日

豊中市 寺田花宵

姉の病氣(二句)

肉親の病いはがゆい顔となり  
治したい人へ憎まれ口となり

餌さ捨てて小鳥は籠を逃げてゆき  
旅の町それも世帯の目で眺め

岡山県 藤原秋月

妥協ではないが放任しておこう  
傷口を見てから少し痛みだし  
風鈴も気長に風を待つており  
伝言板ふられたらしい字が踊り

小松市 関戸宗太郎

天気予報当りばなしで稲が枯れ  
無料バス競馬へ金を捨てにゆき  
雨蛙二十九日目の雨に濡れ  
身にまといきれない幸を子へたくし

岡山県 浜野奇童

肩ポンと叩かれ名まえ聞きそびれ  
定休日守らぬ店に助けられ  
母はまだ迎えにこない窓の雨  
かあさんが帰れば喧嘩またはじめ

豊中市 戸田古方

どんな化粧か鼻のあたまが光つてず  
お遍路にきけば衣裳も貸すそうな  
時差出勤初発にのつてみたらうか  
歩き歩く歩け歩かせいつばい

岡山市 江国 幽谷

からツ梅雨早乙女笠を陽にかざし

八代市 佐野 卜占

相済まぬみみずよ俺は百姓だ  
紋白蝶可愛らしいから子に追われ

平景清の墓  
荒れ果し景清廟に蟬の声

過ぎにし特攻隊を偲ぶ

兵庫県 小西 無鬼

南冥の果へ散華の翼を振り

涙かくす眼鏡だつたと知らなんだ

西南役薩軍将士の墓に詣で

人の目を感じた足の早めよう

稚児桜眠れ故山の父母のもと

夜の蝶などと生きてく道もあり

鳥取市 河村 日満

統一選挙  
投票所雨でバイトも手をつくね  
大呼のない街に還つて朝寝坊し  
こんな奴が課長で候おかしけれ

大陸回顧(二句)

姑娘に惚れて忘れぬ公主嶺

大陸に四季あり兵としての過去

明治百年政治は墮落するばかり

大阪市 大坂 形水

下関市 中村 九呂平

口答える子の知恵がこわくなり

出る釘の兵法知つて引つ込めず

一円の安値に主婦の軽い足

名古屋市 吉田 水車

下関市 国 弘 半 休

八月十一日不肖選歴

ついてないまま選歴(ふりだし)へ戻り

テレビの勢にしてませた子を叱り

漢詩ならささしずめ絶壁三千丈

奥黒部探勝

通勤はモグラの道に似たるかな  
異状天候ヒヤヒヤさせて梅雨に入る

倉敷市 本田 恵二朗

妻と娘の家にされたシヨツピング

シヨツピング結局特売場で買ひ

シヨツピング亭主は煙草買うただけ

大阪市 山川 阿茶

後妻の児孫と一緒におばあちゃん

童貞でうちのスピツツ終りそう

祭礼へ馬トラツクでやつて来る

門真市 福島 鉄児

バスガイドにしわくちやの手を労わられ

云うだけは云うて妥協のコツも知り

ピヤガーデン綺麗な星を忘れてる

岸和田市 内藤 ささ子

笹のある涼しげに見えて夏

そろばんを出すほどバーに借りがあり

髭のある方の八封に見てもらひ

加賀市 那谷 光郎

廃品の豪華さ生活を羨まれ

胡瓜でも日蔭育ちは拗ね曲り

鏡掛け更えて再婚の気にもなり

岡山県 大森 娛句 柴

水不足苗背伸びして田植待つ

新築の分家も細い煙立て  
農繁期余所に新婚里帰り

倉敷市 木村 千容

根廻しの甘さ一本とられたり

ありし日を偲びステレオ遠くきく

十坪ほどの庭を右往し左往して

鳥取市 森本 法泉水

徳島出張

六月に来てお座敷の阿波おどり

妻の入院続く

花の水かえて病人気がかわり

娘京都へ

旅立ちへ男の親は金のこと

堺市 高崎 雄声

強盗の言い分クルマ欲しかつた

ムダのない暮して何かきこちなし

生きている証拠ひげがのびてくる

岡山県 田村 藤波

人生は問いつ問われつおもしろい

有刺鉄線心に張つて寡婦をたて

風死んで扇風機だけの音になり

竹原市 杉原 愛 鳩

弁解がみじめになつたから黙る  
頼りない蔓と蔓とがからみ合い  
遅刻した弁解少しのんでいる

大阪市 西 森 花 村

抽象画天地無用と言う如し  
教育ママパパも一緒に叱つとき  
御活躍祈つて後は飲むばかり

京都市 松 川 杜 的

浄瑠璃寺岩船寺吟行

青竹の根元ここにも石仏  
石仏を導くように蟻の列

「秋篠寺」にて

煩ずりを受けてくれそう伎芸天

倉吉市 奥 谷 弘 朗

人間の余裕古書にも目を通し

絶好のチャンス女房は婦人会

エリートを部下にもつてる気のつかれ

東大阪市 森 下 愛 論

ナフタリンの匂をさして春衣着る

本棚のへそくり探す手間がいり

お迎えの車返して万歩計

岡山市 池 田 古 心

茶に煙草まだ楽しみのある病床  
植田涸れ井戸涸れ仰げば空碧し  
文化財になりそこに水車廻い続け

下関市 桜 川 不 水

長い舌短かい舌と使い分け  
蓄生にされてやぶ蚊は叩かれる  
どうせ吹く法螺なら太平洋へ吹け

大阪市 木 村 十 悟

国宝になつて落書とみに殖え  
痴わ喧嘩昔の恥をさらけ出し  
脱げるだけ脱いで女は夏になり

明石市 家 沢 薺 花

目に青葉都心に住んで御堂筋  
一人子の も一人欲しい鯉職  
隠居部屋優遇されて隔離され

高槻市 山 田 季 賛

女から見放なされてホツトする  
子等の方が僕の気性へ逆らわず  
コーヒーの甘さで今日の恋甘まし

笠岡市 木 山 遠 二

土地ブーム雲雀が鳴かぬ里となり  
つい有封に入り人さまを軽蔑し

日日好日されど乏しい持時間

竹原市 山内静水

恥しい財布わざわざ届けられ

サロンパス匂わず妻となりにけり

ペン先でなら孝行の真似も云え

芦屋市 丸川初甫

蟻のすれ違いにも似てターミナル

父五十回母二十三回忌法事

成仏をしたのか母の夢も見ず

過去帳いっばいえらいこちやと気づき

東大阪市 久米奈良子

誰よりも君を愛すと遠ざかり

たしかめた愛は空虚なものとなり

さびしさよ問わず語りの君となり

宇部市 平田実男

水虫がスタイリストを素足にし

ホステスのみんなおんなじような過去

生傷の絶間が出来た子を案じ

松江市 中川晃男

実印の貫録読みにくい書体

目撃者が父さんでよかったつまみ食い

あの日あの時から日本は狭うなり

自家用車女の方も免許もち

小豆島の旅

六月の旅行暇な奴にされ

小豆島神風遍路の土けむり

熊本市 岡本昭三

スモッグを胸一杯に泳ぐ鯉

淋しさをかみしめている溜の音

ローカルの汽車はこころでひと休み

大阪市 河井庸佑

ライバル意識まざまざ見せて参観日

増築へ寄付の噂が先に立ち

選挙すみ地元の地図がややかわり

竹原市 小島蘭幸

針と糸借りれば釘つけてくれ

嘘言えば子供がじつと目を見るよ

値切つたら僕アルバイトですと言う

大阪市 福井野迷路

さて何の用か二階まで来て忘れ

人間ののろさにゴキブリ感じ入る

友の癌俺もそのうちと慰める

東大阪市 本多清人

終業のベル父ちゃんの顔にする  
団体さんお帰り女中の紙テープ

三井酔夢さんに逢う

又逢えるつもりで軽い会釈だけ

神戸市 仲 どんたく

頬突いて起してバイバイさせて出る

お茶お花書道身に付けまだ嫁かず

増築へ我が臨終の部屋も入れ

高石市 谷 沢好祐

社で六日家で一日使用され

退職金せめて墓石でも買おう

給料日だけのハンコが要る勤め

ハワイ 羽 佐間柳葉

終局の頼み自分の外になし

荒れ狂う議場選良と云う集い

むかつ腹利害を度外する若さ

大阪市 宮 地 双 楽

ポーナ스에妻は勝手に予算くみ

寸借をされた時計が質屋ゆき

暇と金あつても温泉気に合わず

倉敷市 水 粉 千 翁

睦まじく日々をもめてる姉妹

踏まれたと言わず雑草空に向き

別府路へ

人間を寄せて高崎山威張り

兵庫県 遠 山 可 住

草の闇に平和があつた夏の虫

タバコやめて女のような一服し

気前よい返事に妻がびっくりし

松江市 柳 楽 鶴 丸

コーラスで見た女房のでかい口

交通事故のない不便な村に住み

よく喧嘩したなと笑う銀婚式

大阪市 西 川 誓 二

姪の婚礼

披露すんで元の清楚の顔になり

仏像に信仰忘れた目が睜り

湯気出して氷も夏は瘦せてゆき

新居浜市 近 藤 凡 生

古寺の仏も動く初夏の風

人は人己が生きる炉を見つめ

何故生きねばならぬ愚問眠らせず

笠岡市 松 本 忠 三

旅の恥残し仲居に見送られ

天秤にコネをちよつぱり載せて決め  
焼香の帰り花輪を見てまわり

富田林市 岩田美代

あやまちない淋しさにふと悔いる  
手放した風せんみどりの風が追い  
それぞれの愚痴面白いまい風呂

大阪市 森本良夫

もう一畳広さがほしい荷を運ぶ  
モーニング吊し談笑する前夜

船出したかぎり自分の櫓で進め

鳥取市 藤本礎山

妻の座に妻が居るので今日も無事

七癖が互にあつて真珠婚

佳い返事聞えぬ顔で聴きなおい

笠岡市 木山要次

死なないで呉れと氷のう少し下げ  
背信のうつろを風が吹き抜ける  
拗ね方も年頃らしくすねて呉れ

鳥取県 森田布堂

風雪に耐え磯の松いい姿

初対面その目で衣裳値踏みされ  
人づくり子らの主張も聞いてやり

愛媛県 村上旭童

けんかする水がまだあるうちにはよし  
いらいらと雨まつている暇があり  
なまぬるいビールにする気御あいさつ

大阪市 室谷鉄舟

植木鉢出したり入れたりして咲かし  
エロの記事ないと売れない世を憎む  
退職金うまい話を五分に聞き

守口市 村田瓢太

鵜に似たる自嘲勤めのタイ結ぶ  
ガタの来た身体いたわり日々を生く  
通勤の毎朝出会う同じ場所

奈良市 村上春巳

お早うに答える婦交の目がきれい  
この俺の毒舌に耐え妻老いる  
風薫る大和路塔のある景色

姫路市 隠岐不醉

隣りへの見栄で無理した鯉のぼり  
愚痴言わず沈香もたかかず勲八等  
猿の知恵カメラ向けたら横をむき

宝塚市 小島無聖

祈りたい気持へ太陽きつすぎる

くる日もくる日も爽涼としてやもめ

電灯を消してきつちり今日は過去

大阪市 天正千梢

白いものふえても足ふみまだ続き

愛犬の抜け毛の量は春近し

五十年空気のような女房にて

出雲市 原 独 仙

六月の帰省緑りに染まりそう

せせらぎに河鹿鳴く谷おらが村

計器頼つてみても赤字なり

愛媛県 渡 辺 曉 童

アナタスキデスと言われてみたらどうします

秒針にこづき廻されながら生き

ラーメンを食わされそうで長居せず

平田市 久家代仕男

聞き捨てにする気が社長お茶をいれ

高架鉄ネオン渡る音をたて

銭別に新硬貨とは痛み入り

枚方市 宮 川 珠 笑

するなどは云わず失敗談聞かせ

お話中待つ間に怒り消えてくれ

晩酌の味は無事故で暮れた味

大阪市 中川 滋 雀

クーラーの上とも知らず燕の巢

厳肅な事実手もなく親が折れ

昨日ミニ今日は着物の裾押え

富田林市 川端 東 雲 楼

音無しのかまえ瞳の涼しすぎ

よろしおした癌でなかつた癒りよう

日々好日ただ雑草と根くらべ

和歌山市 野村 太 茂 津

四十過ぎ妻は第三反抗期

妻の舞褒めて一本追加する

お湯たぎる妻悠悠化粧中

ハワイ 上 田 紅 溪

早よ嫁をもらわにやママがよけい老け

雑音も聞けずお墓は淋しかる

大切な処でテープ犬が吠え

ホノルル 加川 カロ 女

玉にきず理屈つぼくてとうが立ち

子の出世一族みんな浮き上り

苦笑い居留守を孫に怪しまれ

富田林市 浅 川 八 郎

強きを助け弱きをくじく納税法

良薬にして口に甘し盗み酌む  
団地の垣ミニスカートその如く

京都市 大鶴喜由

もう一人産めよ産まぬで二人もめ  
妹の気確かめてから姉の恋

島根県 藤井明朗

別れるという実印のしあわせ  
孝行はしますと子等は都会に出

出雲市 尼 緑之助

子供つばい声で答えるインタビュ  
一億を越えて我が家は此処にある

藤井寺市 西 いわを

肌合が合うて信用してしまい  
人間のずるさへ犬は首かしげ

大阪市 水谷竹荘

落書のようにも見える書道展  
新築へ一番に来る飲み仲間

西宮市 若林草右

抜け道もこしらえ予報明日は晴  
地上げして土筆のでない春となり

大阪市 吾郷玲人

みな送り出した座敷の広さかな

ドア閉めているから冷房かと思ひ

呉市 林野甦光

蓮池のめだかきれいな故郷があり  
マンションの昼が届いたBランチ

鳥取県 清水一保

人間の値段も決まる交通禍  
亡き母と同じ節の子守唄

今治市 越智一水

どん底に生き唇に歌をもち  
いれずみの女が街の底にすみ

伊丹市 小川静観堂

天上からおのれの葬儀に首ひねり  
白々と夜が明けるなんの夢だつて

京都市 都倉求女

どぼ漬の歯切れも初夏の朝の音  
新緑が目にしむとこで信号待ち

岡山県 横山一声

へそくりを財布に入れればすぐに消え  
妊婦服同士で話にうまがあい

松江市 岡崎祥月

旱天をゆく今日も亦我が愛車  
愛情が湧く五十路を過ぎた頃

倉敷市 野田素身郎  
だまだまされ結ばれたようなもの  
雑種の幸せどの犬とでも恋ができ

大阪市 児島与呂志  
飲み過ぎてはなんと胃薬さし出され  
日光に肌まぶしそう初夏を出る

熊本県 有働芳仙  
私ですよと眼鏡とつて見せ  
見えるかも知れぬ按摩の色眼鏡

大阪市 今西章雅  
戻らずに義弟の妻となる覚悟  
デザインをちよつぱり変えて定価あげ

奈良県 西辻竹青  
抜苦興楽日曜妻と寺まいり  
崩さない不敵さ魅力ある女

倉敷市 井上旭峯  
一票を先輩預けたように来る  
冷蔵庫妻不機嫌な音で閉め

大阪市 宮尾あいき  
神経痛の足で廻つた百度石  
昨年のロングミニーになる脊丈

福井県 大山雅城

田植女若く色香を漂わせ  
長生きをしろと呑気さ蔑まれ

兵庫縣 河原みのる  
余り苗の不運を拾いあげてみる  
兄継がず弟もつがず瓦落ち

兵庫縣 大江秋月  
水虫が忘れず今年も尋ねて来  
後任が机の位置も派手に変え

東京出張 美禰市 安平次弘道  
銀座での気えん社用は有難い  
よそ行きの顔が並んだ二重橋

新居浜市 小林孝正  
人の口恐わいと思ふ噂聞き  
ごめんねと一言云えぬままの溝

守口市 羽原静歩  
明治村儲かるように灯をともし  
百貨店とんぼ蝶々を皆揃え

加賀市 木村一路  
母の日へせめて病床から便り  
バスガールにあやされながら宿に着き

大阪市 賀本昇

賀本昇

お噂はかねがねなどとゴマを擦り  
ここいらが山場持ち株売りに出し

熊本市

楠田英子

なつとくができぬか蟹の泡をふき

子曰く親爺の夢に添いがたし

大阪市

碑弓彦

夕立ちが逃げてぶつぶつ水を打ち

夏の午後赤信号の長いこと

泉大津市

高津徹也

鏡餅母と離れて母恋し

冬鏡女のおせるパフの音

福岡市

太田湖平

梅漬の夜乾しに憎い俄雨

見舞客外してほしい用が出来

八代市

永松道雄

若鳥の骨付しやぶる檻の猫

島かげで寶石育てる真珠貝

新居浜市

安藤桂仙

子に様をつけて手紙を書き終り

巻寿司の端だけ貰うて留守居番

泉佐野市

大工陸夫

停年を境に世間狭くなり

盆暮と気の付く嫁がお気に入り

和歌山市

西尾公作

横顔で泣いて高座は笑わせる

板囲い広告画いて家建たず

岸和田市

葛城伊三郎

相い宿でおもろい声の寝言聞く

よい柄のふとんは表を出して干し

和歌山市

土谷城石

板囲い覗けば凄じいビルの基礎

ルンペンが徴の出る程垢をため

和歌山市

二越俊爾

口留めをされて口留してしやべり

やせ葉太る葉も共に売れ

加賀市

細呂木魯木

レジャーブームバスを横目に田植する

ミスカートひざつ小僧まで化粧する

★

川村好郎

息づまる会議へ電話鳴つてくれ

無理ないと許す心がほぐらせる

わが判断間違いなしにつまづきぬ

肩を揉むこともせなんだ母の日よ

この次は僕が奢るを軽う聞き

西尾 栞

築地曲れば鴟尾が見え門が見え  
鴟尾仰ぐ我の心の如何に小さし

金堂 礼堂 鼓楼・鐘楼 案内の僧の早すぎる

笑わせておいてガイドの僧は歩を速め  
一通りきいてもう一べん廻る唐招提寺

北川 春 巢

クラス会そろそろガタが来た話

むし暑い夜は冷房の話する

短冊の所望をされてから酔えず

株暴騰戦争の知らぬこと

妻退院

退院へ歩調をとつて歩きたし

若本 多久 志

父の日やでと催促せにやならず

主婦連の一喝牛乳薄くなり

床の間の読めぬ掛軸は唸つとき

政治家にあいそつかした空梅雨か

ボーナスを聞いて取られる世とはなり

菊沢 小松 園

かりそめの言葉としても受け取れず

妻にもう一つの顔があつて午後

金魚の眼だまされまいとするあせり

箒目に砂のいのちは生かされる

垢抜けのした挨拶で先き帰り

故松江 梅里

遺句

恵まれぬ過去が苦難に耐えてくれ

じつくりと泣くまで待とう野心持ち

考慮しておくとは既決の函へ没

客足をとめるネオンへ宵の雨

おしのびで立ち寄る星のきれいな夜

清水 白 柳

電化して牛を知らない児に育ち

演歌調また繰返す世の移り

職人に明治の戸棚眼に残り

御けい古のラツシユ外して帰る花

みな去んであとに残るは美男美女

故松江梅里氏の告別式や追悼句会には他柳社の  
方々や川柳塔社柳人の絶大なるご厚志をたまわり  
あつくお礼申しあげます。

追悼句会のご案内を誌上で発表する時間がなく  
ご通知できなかった方々には深くおわび申しあげ  
ます。

川柳塔社

# 川傍柳 初篇 研究

(五十)

前田喜代人 川端 柳風

岡崎重義 高須啞三味

清 博美 丸 十府

藤井和雄 岡田 甫

478 ひじ坪が鳴るとふしミセみんな引

単引 司

清「ふし見世は、楊子見世ともいい「江戸にて楊子商人の多きは、浅草寺境内に勝る処なし。此商人古くより有りとなむ」(嬉遊笑覧卷二)とあり、浅草寺本堂の前から隨身門に至る道の両側及び観音堂の後辺にズラリと店を並べていた。「ひじ坪」は門の扉を開閉する金具。寺は暮六つをもって仁王門を閉め、人の出這入りを止めるためふし見世も店を閉めて退散しなければならぬ。この仁王門を閉めるところを「ひじ坪が鳴る」と表現しているわけである。「ふし店の仕舞拜んで帰る也」(一一・27) 藤井「贊。「ひじ坪」が仁王門のひじ坪とは知らず、何のことか小生わからなかつた。尚ふし見世は、齒黒染に用いる五倍子

を売る店、五倍子見世と云い楊子と五倍子とを売る狭く奥行のない店が浅草にあったひじ坪は肘壺で蝶つがいのような金具で肘関節と同意語に感じられ、云い得て妙だ。

高須「「ふし見世は昼食の時尻を向け」(初・40)で、夜は片付けて帰る店だから諸事簡単であつたらしい。

丸「贊。ずらりと並んだ美女が一時に店をしまふ。「引け」がよく利いている。岡田「諸説の通り。

479 雪の朝叔父伯父が寄っている 一 甫

清「やれ花見、やれ紅葉狩、やれ雪見と吉原通いばかりするどら息子に、親父もとうとう我慢がならず、親戚縁者を集めて、なんとかこらしめてやろうという相談をもちかけるに至つた。「おさまらぬものだ」と親父雪をかき」(七・4)「伯父までが寄

ると座敷のふえる沙汰」(二三・31)「雪の朝親父火箸を斜にかまへ」(傍三・2)など叔父、伯父はいずれもおじだが、叔父は父母の弟であり、伯父は父母の兄である。

藤井「叔父伯父と読ませたのでいかめしい叔父伯父を想像させものものしいお集りいづれ鈍子行となることだろう、ただならぬ空気を感ぜさせる。風雲急な雪の日の朝帰りの息子知つてか知らずか。

川端「贊。親族会議で座敷牢ということになりそうである。

高須「雪の朝だから、昨日雪見に出たり帰らぬ息子に、父親が叔父や伯父を呼んだので、男兄弟が呼ばれたところに、父親の並々ならぬ覚悟が感じられる。

前田「諸説に贊。句のうらの状景が感じ

られて佳作。

丸二贊。「叔父伯父」と漢語を持ち出したところに父親の覚悟、その場の物々しい情景もほうふつする。

岡田二贊。

480 とふふやの身代下駄の直なほどなし

眠狐

清二直は値と同じ「ネ」と読む。この高価な下駄は、遊女高尾、島田源三郎、伊達綱宗侯の三角関係から生まれたもの。島田に依頼された浮世渡平は、吉原帰りの綱宗を日本橋で殺害しようとしたが逆に斬られた。その時綱宗はかろうじて京橋辺の豆腐屋へ立ち寄り、その豆腐屋に履いていた伽

羅の下駄を与えた。この伽羅の下駄はべらぼうに高値のもので「歩くたび一二兩づつ下駄がへり」(二四・五)という品物であり与えられた豆腐屋にしてみれば「過分といふ礼豆腐屋はつにうけ」(二六・11)というものである。しがな豆腐屋にしてみれば、突然身代よりもずっと大きな財産がころがり込んだわけである。  
高須二贊。「豆腐庖丁で削ってくべて見る」(傍一・37)  
丸二贊。歩くたび一二兩づつも減るほどの香木伽羅だから、しがな豆腐屋の身代などとてもこの下駄の値ほどなかったろうとの洒落。

岡田二贊。

481 あく迄ぬれて蓬もも菖蒲やせうぶ 一 甫

清二すでに何度か出てきた菖蒲売の句。年中行事でいえば、旧五月、端午の節句の句であり、この頃はちようど梅雨で雨の日が続く。買った菖蒲は家毎に軒に蓬を添えて差したり、菖蒲湯に入れたりする。「どろ足の干る頃あやめ売しまひ」(一九・1 高須二「あく迄ぬれて」がこの句の山、晴れ間を待っていらぬ時節商売で「よもぎ菖蒲や菖蒲」は、その売り声である。  
前田二贊。言葉のはこび凡手ではない。  
丸・岡田二同。

麻 生 葭 乃

一周忌三回忌とて遠ざかる

松江梅里氏を悼む(二句)

君も又世にありし日の姿消す

つがいはなれた鴛鴦一羽世を泳ぐ

スローモがよりによったる廻りみち

隅にいても喰うて喰われる世であるか

たのしさひろがる お買物



**阪急**

大阪梅田本店・神戸支店  
東京大井店・数寄屋橋店

# ああ松江文夫翁之御霊

したいことみなしてせつかち先きに逝き（好郎）

六月二十八日 午後八時二十分急逝

六月三十日 午後〇時三十分告別式



## 弔 吟

（順不同）

天日昏し君の笑顔を見失い  
君も又世にありし日の姿消す  
いかつちとあり君逝きし夜を憶む

中島生々庵  
麻生 葎乃  
岡橋 宣介

人生は今日がはてかもわからない  
思い出はビールにすしをつまむとき

富士野鞍馬  
金泉 萬楽  
宮地 双楽

花も香も消えて淋しき梅の里  
この次は蓮のうてな塩かげん  
誠実は信仰の姿のままで逝きたま

菊沢小松園  
西尾 栞  
若本多志

惜別の宴となりしか鳥羽の旅  
命まで川柳に賭け神にかけ  
清水 白柳

川村 好郎

夢のようだとか、嘘のようだとかよく云い  
もするし聞きもする。

梅里さんの急逝は、まったくこのようにこ  
つ然となくなられたのである。

六月二十八日、自宅で夕食をすませた梅里  
さんは月次（なみ）の金光教アベノ教会の祭  
典へ出席された。

八時に式がはじまって、梅里さんは冠わり  
白衣、白タビの装束でノリトを静かに聞いて

おられたが、急に息苦しくなったらしく、他  
の人たちに迷惑のかからぬよう、そっと別室  
へ一人で立って行かれた。

「どうなされた？」と、隣席の人にたずね  
られたが責任感の強い梅里さんは、

「なあに、ちよっと休ませてもらいます」  
と乱れた様子もなく静かに出て行かれたので

ある。しかし隣席にいた人が気になるので、  
祭典がおわってから、梅里さんを見に行かれ

たら、もうその時には息を引きとられていた  
のである。

「狭心症です」と、かけつけた医師は診断  
した。声をかければオーと答えそうな梅里さ  
んだったが、もう帰らぬ人となっていた。

当夜はわれらの怒りそのままに雷雨すさま  
じく荒れに荒れた。御霊は自宅の階上八畳

の間に安置され「天地金の神」と書かれた横  
額や「逢いたかったあいたかったとすそをふ

み」の路郎先生の玉句に見守られて安らかに  
眠っておられる。

告別式の三十日は晴天にめぐまれ、会葬者  
約七百名。用意されたタチハ（租供養）六百

名分がアックというまになくなり、交通整理に  
警官が汗だくだったことも、氏の生前の人格

をものがたっていた。

瓜破靈園の三時三十五分。NO・112の前  
に嗚咽どっと満ち、窓越しに天の一角を見れ

ば雲の峰から亡師の声あり、  
「ヨウ、来たか」——合掌。  
（不二田一三夫記）

# 人生の達人

## 堀口 堯人

こないだまでついそらで、お目にかかっていた顔が、もうこの世の人でないなんて、まるでぐらかされたようで。それに、いっでも、大阪の市井の人であっただけに、

こんにはさよなら自転車盗られてたと云う、今は亡き梅里さん御本人の句のような気がする。いつでも、物静かでおとなしく、そのくせ、少しもじっとせず、何か動いて世話をした方、それが私の印象であるが、さりながら、なんと

立膝にみとれ三光ふいになり  
梅里  
などと、けしからん句をものするゆとりもあれば、どうして、どうして、

命まで賭けた女でこれかいな  
梅里  
と、ひややかに女を取扱うことも心得た、油断のならぬ浮気者。

一流の妓になって振り向かず  
梅里  
亡くなられてから、俄かにその作品をしらべてみると、取材範囲は情事のいきさつまでに及び、青白い連中が、人生詩のなんのとはざいている間に、さつさと、人間性の奥深いところまで覗いていた梅里さん。

気まぐれな女の嘘の美しく

梅里

しかも、それは、単なる観察ではなく、自身自身の経験の抽斗から、川柳の眼鏡で探り出したような作品が多く

理解ある主人と云われ妬けもせず  
梅里  
こんな、わけのわかぬお方なら、生きてはるうちにもっと、しみじみと話しておけばよかったのに、金光さんの神様になってしまわれては、それこそあとのまつり、

唇を許しただけの蟹狩

梅里

の、句を味わいながら、こしらえごとにして、も、よくぞここまで五七五調にこなしたものとあされるほかはない。

松江梅里さんは人生の達人であつたと思う。

## 理想の場を得て

### 麻生 葭乃

梅里、好郎の兄弟句集が太陽の光をみないうちに梅里さんは亡くなった。好郎さんから其報せを受けた時は、大粒の雹が俄かに降つて来たような狼狽を感じた。それ程梅里さんは頑丈な人であつた。短命を予想するような人ではなかつた。

いのちまでかけた女でこれかいな

と云つた軽い句を作つた人、いつも飄軽に人を笑わせた梅里さんは今あの世の人である

とはどうしても思えないのである。人間には定命と云うものがあると、いくら自分に言い聞かせたところで、それは納得のゆかない気休めにすぎないのである。残された人にとつては、亡き人を見送る事は忍びがたい悲しみである。然し梅里さんは信仰の人であつた。聞くところによると教会へお礼詣りに行き、装束を脱ぎ、白足袋のコハゼをはずした途端に息をひきとられたそうである。何の苦しみもなく、そして場所と云い、信者としては理想の最後であつたと思う。信仰にすがる梅里さんの商魂には一分のすきもなかつた。今にもはちきれそうに生き生きとしていた。其緊張を時々ほぐすのに川柳があつた。

各地の柳友へ呼びかけていた大万川柳は作句意欲促進に大いに役立っていたのである。梅里さんのもう一つの余技に唄があつた。誰もがゆるす名人芸であつて、宴会がおひらきになる前には必ず真打をつとめることになつていた。こんな梅里さんが今は亡き人とどうして思えるだろうか。私は静かに考えて見た。人間の寿命と云うものは決して現世で立ち切られていくものではない。形を変えて永劫につづいていくものである。花に戯れている胡蝶を見ても判ることだが、胡蝶自身は自分の前身は毛虫であつたとは思っていないであらう、人間の浅はかな智慧はちやうどそれと同じ事、亡き人の新しい誕生をよるこんであげずに、唯々なげき悲しんでゐるのである。梅里さんは今張りつめた商魂からも解放され、あらゆる血縁の絆からもほどかれて自

由な天地をかけめぐっていられるのだと信じたいのである。「子よ妻よばらばらになれは浄土なり」の路郎の句が今一層ハッキリとわかって来たような気がするのである。

## 梅里さんに最敬礼

北川 春 巢

去る六月三十日、「松江梅里追悼号」に氏の思い出を書くように、というハガキが編集局から舞いこんだ。ちようどの日は故今村荒男先生（阪大名誉教授、医学博士、勲一等瑞宝賞正三位、日本学術会議議員、大阪府立成人病センター所長）のご葬儀があり、私も参列して帰った所であった。

私は最近阿倍野区の梅里さんのお宅の近くへ転居して、家の中の整理もまだできていないし、また交通局病院の院長を拝命して、診察の際を見ても挨拶廻りもせねばならず、名実通り公私多忙という日を送っていた。従って川柳句会の方へはどちらへも失礼して、柳界の様子も雑誌で知るぐらいしか知ってはいなかった。

梅里さんの追悼とは、梅里さんが亡くなったのであろうか？ご病氣だとは全然知らなかったし、私には信じられなかった。転居の日

それは編集局からのハガキを受け取る十日ほど前のことだったが、梅里さんに電話でお願いで、電話一本で、転居の手伝いの人人への昼食弁当を届けてもらった。梅里さんはいともお元氣なお声で引き受けて下さって、約束の時間には弁当を間に合わせて下さった。値段の割りに大へんなご馳走で、みんなの評判もよかった。私は心中、梅里さんに感謝したのであった。その梅里さんが亡くなったのだらうか？ハガキには確かに「梅里追悼」と書いてある。私は自分の目を疑い、「一三夫氏のお宅へ電話をかけてみた。すると、それは残念にも、間違いではなく、梅里さんは二十八日に急逝されて、きようがそのお葬式であった、というご返事であった。

：朝（あした）には紅顔ありて、夕（ゆうべ）には白骨となる身なり：

という、子供の際に聞き覚えた「白骨のご文章」の文句が、一瞬私の頭の中を横切った。医者という職業が、このような事態を経験したことも数多かつたが、自分の身近かな、特に二十数年来親しくして来た人の身に、この事態が起こったことに何ともいえぬショックを感じたのであった。今村先生はガンのため長らく養生中だと前々から伺っていたのだが：

梅里さんの川柳に対する情熱は、十六年間も続いた「大万川柳」に最もよく現われていると思う。それらに対しては、他に述べられる人もあると思うので、私は特別には書かぬことにした。私は「大万川柳」その他

で梅里さんにはお世話になりっぱなしであった。今はもうそのご恩返しもできない。ただただご冥福を祈るのみである。

合掌

## 不朽洞杯のこと

若本多久志

川雑時代、毎年末になると新しいカップの調達役を仰せつかるのが、梅里君と私。ある年どうした間違いか、梅里君は私に頼んだつもり、私は彼に頼んだつもりで、お互に涼しい顔して正月を迎え、句会の前日に斯々の次第とわかって大慌て。二人で下寺町のカップ屋へ買いに行ったことがあったが。

その時彼が

「あなた、不朽洞杯、何べん獲ったんや」  
との質問。

「僕は、まだ一べんも獲ったことないねん」  
「へえ、わても葭乃先生の代選で一回、路郎先生の選ではまだゼロや」という話になり、お互に二十年以上も川柳を作っていて、この有様では、

「川柳ちゆうもんは、よっぽどむつかしいもんやなあー」と大笑いをしたことがあったがこの時ほど、彼の人間味をしみじみと感じたことはなかった。

写真説明・梅里さんの逝去数日前、六月二十四日志摩ス  
カイライン・朝熊山頂上で立つている右から故梅里、小松  
園、好郎、前列右から栗、多久志、圭井堂諸氏。



頭の先から足の先まで、誠実が充実した彼  
それでいて時々、飄軽なことを言うて人は彼  
笑わず彼、その外ETC、彼を偲ぶ語り草は  
尽きないが、何としても惜しい友を亡ったも  
のだと痛嘆に堪えない次第である。

幽明を異にして知る人間味  
惜別の宴となりしか鳥羽の旅

多久志  
同

## 一流の朋友

西尾 栞

「人生朝露の如し」という言葉は、漢学者の誇張語だと許り思っていたが、今度の出来事で、その語が誇張でないことを知ったが、余りにも余りにも、儚ない人の命に、何だか生きてゆくのが嫌になってしまった。夢のような出来事の為に、まだ実感が、ともなわれない。例会や理事会にゆけば、まだまだ会えるような気がしてならない。何かの会に行つて愈々会えないことがわかると淋しい淋しいてたまらないだろう。

梅里さんのなくなられた様子をきいたが、御遺族の方々には誠に本意ないことだけれども、最高の御昇天だったと思う。矢張り御信仰の賜だった。御信心も一流だったわけだ。事業の方も発展の一路を辿つて、今度千里ニュータウンに大きな食堂を経営された。事業の方も亦一流だった。

川柳の方は御承知の通りだ、川柳塔副理事長、大万川柳会と人の及ばぬ世話もした、川柳も亦一流だった。文字も大層上手だった。速かった。筆を持たせば矢張り一流だった。ジョークも旨かった、彼独特の毒舌も面白かった、そして決して人をおこらさない毒舌だ

った、之も亦一流だった。唄も亦大変旨かった。鐘を三つならしたそうだし、良い咽喉だった。之も自他共に許す一流だった。そうそう誠実と親切はこの上なしの人だった、人の世話や仲人も沢山した、人間関係も全く一流だった。信仰、事業、趣味、親切、何も彼も一流だった。怒は言われないからせめてもう十年生きておられたらと思うと残念で残念で堪まらない。然し乍ら自分も年齢の故で、時々死と言うものを考えている、その時に梅里さんのような、昇天を切に切に望んでいるものだ。考えようによっては、梅里さんの御昇天も亦一流だったと思う。

最高の御昇天ながらさりながら  
誠実は信仰の姿のままで逝きたま

合掌

## 大萬川柳存続

金 泉 萬 楽

今の南大阪川柳会が阿倍野支部句会といった頃、お邪魔をして梅里さんにお目にかかったと覚えている。その後久しくご無沙汰をして終つたが、大萬川柳の募集が始まって何回目だったか、無記名清記、路郎選という魅力にとりつかれて投句を初めたものである。

五、六年は続けたように記憶しているが、その間二回ほどベストテン（一年の総合）に入り、阿倍野の料亭、大萬（梅里宅）での大会に出席、会後の懇親宴では、いつもにこやかにサーブス、洗いのどを聞かせて貰った。お得意は何か知らないほど、何でも来いの達人と感ぜられた。

ミナミの大劇裏のすし屋、近畿地下のすし屋へ首をつつこんだ事もあったが、そこでは梅里さんには逢えなかった。

梅里さんは有名な達筆家で毎年の年賀状は必ず墨痕あざやかな一句を見せて戴きしばし恍惚とさせてくれた。

ともあれ、大萬川柳のお世話の大変なことは申すに及ばず、自ら投句して殆んど全回、ベストテンを下らずという達吟ぶりには全く啞然とするばかりだった。

大萬と梅里、大萬川柳、川柳塔の名物であるこの「大萬川柳」を梅里さんの功績を称えるためにも、何かの方法ですつと続けられんことを提案する。

思い出はビールにすしをつまむとき 萬葉

## 虫が知らせた電話

川村好郎

「若しわしが急死したらどうする？」  
「とにかく一番先に松江さんへ電話します  
そして何もかも相談してお頼みます」

こんなことを私たち夫婦が時々話合っていた。それが全く逆になってしまった。

六月二十八日夜、あとにも先にも電話したことのない金光教阿倍野教会へ、必ず参拝している梅里にふと会いたい気になって電話したがその時梅里が教会で急逝したすぐ後であった。

「兄さん頼む」とまず私に知らせてくれた  
としか思えない偶然の出来ごとだった。「松江さんが今逝くなってお宅へ帰られました」という電話の声は嘘としか思えなかった。

「すぐ来てくれ」という梅里の声がした。  
それほど何もかもお互に話し合い、二人だけしか言えない、知らない何事も頼み合い、信じ合った兄弟だった。

六月廿四日、一泊旅行で志摩スカイラインと答志島へ行き、二人並んで魚釣りをしたのが最後で、廿七日に電話で聞いた声が二度と聞けない梅里の声だった。

「歳だけは上だが他のことはいったいどこが兄貴かしらん。頭の髪は薄いし、男前は劣るし、ゼニは無いし、字は下手だし、声は悪いし、川柳はボチボチだし、りんごの皮はよくむかんし……」と、よく冗談まじりに遠慮なく私に言っていた。嘘でない、ほんとうだった。それでも梅里は如何なる場合でも兄を兄として立て長幼の序は決して乱さなかつた。

た。生れるなりすぐ松江家に迎えられ、徴兵検査の時に初めて私がい実兄である事を知ったので実父母の元で一緒に寝起きをした事のない兄弟であったのも原因であったかも知れないが、我が俺かの打とけた仲にも扇子一本前に置いていたことは忘れられない。偉い弟だった。

今年の秋には句集「兄弟」を出そうと約束して楽しみにしていたのに……  
したいことみなしてせつかち先きに逝き

好郎

## 大萬川柳と梅里さん

梅里さん

清水白柳

梅里さんの居ない大萬川柳というものは考えることも出来ない。それ程大萬川柳の梅里であり、梅里の大萬川柳である。その梅里さんが、それこそ突然に、本当に突然に、路郎先生の許へ永遠の旅に立ってしまったのである。第百九十五回の大萬川柳「辞退」の投句をいつものように句箋に清記したままで。

その清記された句箋は六月二十九日夜の「どんぐりOBの会」の席上で私を受取ることになっていたのだが、その前日の二十八日の夜、まだいくら未整理の句稿を残したま

まであの世への旅に立ってしまったのだ。恐らくはそのことも頭のどこかに残っていたのではないだろうかと思うと、胸をしめつけられるようである。

御病氣中の路郎先生のベッドの横で、ヒラヒラ落ちる大万川柳の句箋を胸をとどろかせながら見ていた梅里さんが、先生から選句を受取るとすぐにその場で見て、自分の句があ

## 梅里遺句

夫唱婦随ふるい女と云われても  
凡人でよき妻であり母であり  
栄冠へ内助の功は忘れまい  
兄弟がチヨボチヨボであり恙なし  
長生きは三代続く渡り初め  
明治百年この選膺に湧く斗志  
のんびりして長生き保証され  
働き蜂に似た父の計を悼む  
あなたと呼んでは霧の夜だった  
命まで賭けた女でこれかいな  
相惚れやおまへん辛抱してまんねん  
世界中かけがえのない好きさなり  
夜が明けたくねた時間が惜しくなり  
蝸ねている背中つづけばはねかえし  
落籍されて切れて仲居をしています  
箸割ってくれたで出したふところ手  
呑み仲間娘の婿も頼んどき  
花街の娘といわれたくない躰け

るとホットした顔でニコリ笑っていたよ、と路郎先生からお聞きしたことがあった。それ程熱心に、そして几帳面に、大万川柳を育てて来られたのであった。

大万川柳のことについては四十一年六月号に書いて居るので重複を避けて書かないが、梅里亡きあとの大万川柳をどうするかということについて、御通夜の晩に好郎さんとも話

ほろにがい思い出ばかりのころ恋馳けつけた顔へ待つ身の愚痴も出す  
吊皮の眩はお乳の触れる位置  
途中から抜けていつものところで逢い  
悪友にしたりされたりうまが合  
略式を嘆く古老の座りだ  
盛り場の軒三尺で飯が食え  
北風の夜店は胡座かいたまま  
ブラカード饅頭の匂う橋に行ち  
割箸で種火をつかむ寮の朝  
呵々大笑して悪名聞き流す  
独りもの宵から雨の音と寝る  
ふところが寒いままなり春の風  
傷ついた雀施設の子に飼われ  
ビルの窓誰が吊ったかきりぎりす  
大仏さん一べん佇ってみたかろう  
殺されて雲を見上げるエキストラ  
街角にリルが出そうな霧の夜  
国なまり磯の匂いの中で聞き

(清水白柳抄出)

合ったし、みなさんの御意見も承って、この際、大万川柳は止めるということになった。梅里さんあってこそその大万川柳であるが、若し続けても梅里さん程のお世話をしてくれる人が無いであろうし、もしあっても、先細りになるようだったら、大万川柳の名を汚がすことにならぬと思うので打切った方がよいということになったのである。

路郎先生の「川柳雑誌」は、先生一代きりで廃刊になされた。それと比べては申しわけないが、「大万川柳」は、梅里一代で打切ることが故人への思いやりになるのではなからうか。と思ったのである。

大万川柳最後の課題が「辞退」だが、こんな題を出すから梅里さんがこの世を辞退してしまつたのだと、だれかが御通夜の時に冗談を言ったが、こんなことにならうとは、だれが予想しただろうか、なんだか出題するのが怖くなつてしまつた。「辞退」の選は、梅里追悼句会の席上で発表することになるのだが披露席の脇にいつもの通り梅里さんが座っているように感じることだろう。いまだに亡くなつたという実感が湧かないのだ。

梅里さんが亡くなられたことを知らせてくれた小松園さんの電話を、聞いている私の声に驚きにふるえていたと家内が言っていた。その電話は六月二十八日夜、十時頃で雷鳴のはげしい吹き降りのさ中であつた。

合掌

命まで川柳に賭け 神にかけ 白柳

# ああ梅里さん

菊沢小松園



松江文夫翁之御靈に最後のお別れをする

瞬間我が耳を疑がった、唾を飲んだ、天井が、壁が、床が、自分の視線から遠ざかる思いがした。愕然、呆然、あたりは一瞬、寂寞とした、六月二十八日午後八時三十分、梅里さんが倒れたという知らせである、狭心症、ああ未だ二時間前の出来事である。雨が降っている、猛烈に、空梅雨と騒がれた連日とは似ても似つかぬ雨が、雷鳴が、天もこの才人の死を悼むのか、数日前、二十四五の両日にかけて伊熱志摩に遊んだ。併かも梅里さんの案内で多久志、栞、好郎、圭井堂、小松園の一行が愉快に慰安の旅をした許り、その梅里さんが百時間を出ずに、此のようなことになろうとは、誰が予想し得たであろうか、実に寸前尺魔、朝の紅顔夕の白骨である。その恵まれた才能と明るい性格は誰にも好かれ慕われて居た。成功者に有り勝ちな傲慢さも、冷酷さも無く人をそらさず人を侮らず、謙虚さが身に附いて居た、華道、書道、謡曲、浴曲等その多芸さは川柳塔社中の第一級であったのに、何んとしても惜しい、時人を持たず、突如、幽明境を距ててしまったが、故人の面影は、永久に我々の脳裡からは消えない印象となつて生き続けるであろう。梅里さんの昇華によって、ぼっかり空いた川柳塔の空白を我等同人の熱と力に依つて、より堅固な川柳タワーたらしめたい、それが梅里さんへの永遠の友情であり遺志に報ゆる由縁でもあらう今となつては、只安らかな眠りを祈るばかりである

合掌  
今日からは蓮のうてなで塩かげん 小松園

黄銅六角ボルトナット  
及び特殊換物全般

## 合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 060 三四五二一四  
夜間 060 四四〇八

## 西日本川柳大会 (第19回)

とき 昭和42年9月10日(午前9時)  
ところ 岡山県久米郡久米南町・誕生寺  
(津山線誕生寺駅下車徒歩10分・中鉄

兼 課題 ドライブ・宿命・首・親心・刺  
す・握る。一各題2句内厳守。

自選句 原稿用紙に住所・氏名・雅号明記  
選者 川柳塔社から若本多久志・浜野  
宿泊 奇童・河村日満・山内静水諸氏。

会費 三五〇円(昼食代・句集・発表  
誌)

投句先 一五〇円(発表誌送料共)

投句先 9月5日必着(20cm・4cm句箋)  
で岡山県久米郡久米南町

与削川柳社

弔

辞

川柳塔社主幹

## 中島生々庵

謹んで川柳塔社を代表し川柳塔社副理事長  
松江梅里君の御霊にお別れのご挨拶を申し上げ  
ます。

わが川柳塔社とあなた、さかのほれば川柳  
雜誌社とあなた、更にさかのほれば、あなた  
が麻生路郎先生という偉大な師匠を得られ、  
それによって川柳に情熱を燃やし続けた生涯  
を捧げたというところ、言い換えれば恩師麻  
生路郎先生との出会いが、決して偶然ではな  
かったと、私は固く信じます。

明治四十年五月大阪の島の内でお生れにな  
り、生れると直ちに堺の松江家に乞われて養  
子として御成人になられたので、路郎先生との  
縁が結ばれたわけになります、その間実に  
三十有余年の御薫陶をうけられたのでありま  
す。路郎先生もあなたの英才、あなたの人徳  
をこよなく愛しておられたこと、あなたも充  
分ご感銘なさっておられたこと、川柳人とし  
ても社会人としても今日の大をなさるお人柄  
が先生の御教導によってますます光を増して  
来たことも動かし得ない事実でありました。

路郎先生ご逝去後、門下生有志相寄り川柳  
雜誌社再興の意味の川柳塔社を発足せしむる  
に当っては、あなたが重要な中心人物として

ご活躍なされ立派に誕生の緒を開きましたこ  
とも且つ漸次逞しい生育の途に就かして今  
日の川柳塔社の確固たる基礎を築き得ました  
ことも現在私達三百有余の同人は篤論、社  
内外をたわすむひとし感謝申し上げて居ると  
ころで、川柳塔社の続く限り永久にあなたのご  
功績として輝くものであります。その川柳塔  
社はこれから後ますます、あなたのお力によ  
らねばならぬ事が多く、一例をあげて申しま  
しても、旬日ならずして第二回路郎忌を迎え  
るに就いては、あなたを中心としていろいろ  
企画準備を進めている最中でありました。そう  
したさなかに突如として夢想だにしなかつた  
この悲報に接したのです。

只今あなたの柩の前に立ってこの弔辞を献  
げねばならない私の胸のはりさけるような思  
いは、これが人生の常だと教えられては居り  
ますもの余りにもはかないさだめかなと  
こみ上げてくる哀惜の情をどうすることも出  
来ません。

あの接する人のすべてを抱容せずにはおか  
ぬ温顔と、あの聴く人のすべての腹の底まで  
滲みとおる美声とは、もう再び見ることも聞  
くことも出来ない遠いところに、あなたは行  
ってしまったのです。私達を残して、お家  
あなたにとってはかけがえのない沢山のお家

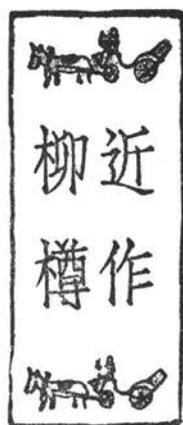
族や仕事を残してただ一人永の旅に出て行っ  
てしまったのです。悲しくて悲しくてなりま  
せん。あなたはよく言って居られました。今  
年は還暦を迎えたのだから、この明治百年を  
再出発点として大いに活躍するつもりだと。  
川柳塔七月号の自選句の中にも

「明治百年この還暦に湧く斗志」

とあるのが今更のようにあなたを偲ぶですが  
となりました。実を申しますと近來あなたの  
ご活躍の範囲がますます広く、深く、強くな  
って参りますのを拝見しまして、二三の人達  
と、あなたの健康について案じて話し合った  
ことも一再にとどまらずでした。しかしあな  
たの頑健なお躰による日常の生活が謙譲と感  
謝とで固められた信念であったことを私ども  
はよく知っております。その強い信念の上に  
立った鋼鉄の如き精神力が活動の源泉であっ  
たことも知っております。

今となつてはその精神力の限界というもの  
と運命づけられた肉體の消長との間に支える  
ことの出来なれど千秋の恨事がひそんでいたの  
ではないかと私の心を一層悲しませるので  
す。こうして綴っておれば名残り惜しむるの  
しさや悲しさがいっまでもくり返えされるば  
かりです。しかしそれではならぬそれは決し  
てあなたのみ靈をお慰める術ではないと心  
の一隅から、叫ぶものがあります。そうです  
に残された、私共は互に固く手を握りあって  
少しでもその実現に努力してゆくことを只今  
ここに誓い合わねばなりません。希くは永く  
力弱き私共の上に加護と導きを賜わります  
ようにお祈り申上げて哀悼のことばと致しま  
す。

昭和四十二年六月三十日



北川春巢選

大阪市和田痴亭

家中を敵に廻わして長生きし

流儀なぞどうでも花は好きで活け

斗病の根気へ負けて松の芯

望遠に換えている間に邪魔が入り

主婦の留守浅蛸も白い舌を出し

松原市谷垣史好

童心に帰れと牧場の牛が啼き

箒持つても俺には肉休労働さ

胸襟を開きあんじよう利用され

トントンと契約とれた日の夕陽

あきらめた筈のあの娘の誕生日

大阪府井上美恵子

やせている肩だと思うサロンプス

山頂の風ブラウスの胸に入れ

赤電話赤いスカートよく笑い

どんな事故なのか松葉杖若し

物欲と食欲みだし空しい日

仙台市平野光道

居睡を撮りたいと思う夜の鈍行

子の忘れ物を届けにマママイカー

餞別も呉れぬ前任地から寄附要請

田売つた金にぎり儲ける術知らず

土地ブーム空地を近所が値上げする

桜井市岩本雀踊子

気づかってくれるは同じ血が流れ

信心をして善人になり切れず

故郷も人手不足の田植唄

母の日を良妻賢母の肩をもみ

東大阪市坂東若芽

出し抜けに路地から蝶の舞うも春

青すだれあちこち初夏の色でゆれ

地獄行きの方が楽しい此の世なる  
喜んだ這うた這うたがもうやけど

鳥取県 鈴木 村 飄 子

ダブダブのずぼんを犬に見つめられ  
若妻にうまを合わせる髪を染め

箸にも下駄にも年令のありわずらわし

作つたが因果ジャガイも攻めに合い

八尾市 宮 西 弥 生

別れねばならない玄関見送らず

としよりの方から折れている同居

ネクタイも変えて乗気になる見合

十代の身によく似合うイミテーション

大阪市 奥 川 継 之 助

おことわり只今妻と冷戦中

素晴らしい夫婦になろう誕生日

女でも惚れる器量で嫁き遅れ

アベックが居て緑蔭へ近寄れず

姫路市 前 田 芙 巳 代

べた足の夫と不足ない暮らし

地虫鳴く我が耳鳴りと疑いて

風上に五月の女たち止まる

古都一人鹿の親子に窺われ

堺市 斎 藤 亜 也

アスファルトふにやりふにやり酷暑の午後  
禁煙を自慢酒の肴にし

やめようと思えばやむよと飲んでいる  
えんどうの青さビールくむ倅

出雲市 森 山 健 太 郎

才媛と云われ恐妻とも云われ

告白を誘う女の目が笑い

スーパリーの値札見に行く小商人

埋め草の方の随筆認められ

尼崎市 後 岡 と し み

すき焼は好きて殺生大嫌い

一本で酔える夫婦で羨し

くされ縁切りそこなつた酒たばこ

神通力あるうち役人天下り

鳥取市 近 藤 秋 星

百姓のベテラン政治には疎く

ゆつくりと嘯んではおれぬ農繁期

法要を知らせる葉書雨に濡れ

いまもつて返事をくれぬ惚れた人

宿毛市 瀬 田 美 知

整形をしたらと思う齢も過ぎ

天下り式に卸屋が値上する

家出の娘顔の整形して戻り

再会へ牛蒡のあくの抜けぬ指

竹原市 三宅不朽

女の眼女を金に見積る眼

灰になるまでは養老院の恋

菖蒲湯の匂い童話の中に居る

守口市 田中笑風

雑草と呼ばれて歟でけずられる

坪十万ひばり無断で巣をつくり

倦怠期おかず聞いても腹を立て

羽咋市 三宅ろ亭

懇な挨拶交通止めており

親燕餌の順番間違えず

とつ弁で出世街道程遠し

島根県 堀江正朗

笑つてるあいだに時間たつていた

感わるくなつたか瘤をまた増やし

不平いう女結構たのしそう

島根県 堀江芳子

お勝手の忙しさへ盲夫そばに佇ち

何が足らぬか空気枕が抜けたよう

折れて出るしおを逃してまた孤独

八尾市 高杉鬼遊

鳥取砂丘

故郷の情緒カラクダねむくなり

星を見て星のころになつてみる

おめでたを見せない服で見せている

大阪市 西本保夫

住友のバツジ寄り道へは外し

子供ばかり叱つて済んだ日曜日

電話なら会議中でも呼んでくれ

島根県 大森孝華

おしやべりが静かになつてバスに酔い

磯風へさざえのつば焼き追つてくる

海ねこの乱舞へ今日も観光団

松山市 河本南牛史

屠殺場牛の急所を見て戻り

憎まれる程の長命とは血筋

出版社明治百年いそがしい

広島県 南条露声

口先で可愛がつてる他人の子

べつびんの客へソロバンまた違ひ

かあちやんの財布シャツター下りた切り

米子市 八木千代

もう帰れまいふるさとの灯がうるみ

許されぬ思慕断つように牡丹切る

就職のもう東京で生きる顔

大田市 藤田軒太楼

魚心あればと誘いのうまいこと

珍らしいうちに抱癖つけて居る

記念樹に想い出深い花が咲き

七尾市 松 高 秀 峰

違反だけが上がつてダルマ片目だけ

悪いことだけは当っている運勢

子の為に苦勞承知で役を受け

名古屋市 花 東 千 久 良

笑い合う女の鉄研ぎすまし

悟つてる目なのに美女の夏姿

ちよいとしたおなごで保てぬ身の始末

八幡浜市 別 宮 す き

葱坊主の道まつすぐに嫁がくる

久しぶりのデート蠅もにくからず

母のこと語つてくれる人も減り

伊丹市 貴 志 千 尋

二十余年振り戦友と再会す

鋭敏と鈍感だけが生き残り

取り巻きが下意上達をカツトする

責任のない法螺ビジョンとも呼ばれ

出雲市 王 紫

鈴蘭が平和な空路到着し

実利より連のうてなを恋いし君

おおらかに折り折伏も腰を上げ

小松市 四 方 天 弘 美

追越せぬバキュームカーに廻り道

作業衣をクリーニング屋捧げ持ち

自動ドア襦袢を着ててもサツト開き

長崎市 吉 田 季 生

洋品店足が逆かさに立つていた

石畳日傘の似合う母娘連れ

坑口の花に無事故励まされ

羽曳野市 麻 野 幽 玄

この上は泣きの一手と孫の知恵

好きだから出来る苦勞の共稼

母喜寿で手術

仲ようにしてやと死ぬ気の手術台

広島県 岩 谷 二 三 枝

目くばせへお酒でのうて茶を運び

すつきりと女盛りをきる浴衣

目が欲しい達磨の唇真一文字

堺市 羽 田 一 扇

分別がついてファイトを無くしかけ

この先も幸運続くかと恐し

一人ではテレビも飽きた日曜日

岡山市 行 吉 照 路

悪い知恵つけた雑誌を風呂にくべ

赤ちやんが寝ていて門前払いなり

孫の口借りて姑を丸めこみ

(前月分) 宿毛市 瀬 田 美 知

發育の悪るいツバメへ虫をとり

ふと燃える心へ年が水をかけ

来る筈のない青闇の門にたち

大阪市 江城 功雄

病み呆けて愛語に遠く妻と居る  
訴えるすべなき愛へバラが揺れ  
高小卒時間の奴隷となつて朽ち

大阪市 田島 案山子

連れ立つて行けば迷わず縄ノレン

マンションを訪うて子猫を抱かされる

天下りにくむお方も天下り

竹原市 時 広 一 路

大安のホームテープの汚ならし

疲れてる頭に美味い初夏の風

車庫のない奴が車を買いたがり

鳥取市 藤 本 鎮 也

お灸さえ火つけはこんなのに面白い

執着も煩惱もなく祖父の骨

これが兄のライバルだとはそまつ過ぎ

広島市 上 代 美 文

人並に生きる月賦に追われてい

上座から膝を崩して酒になり

旧道の松は殿様知つている

新居浜市 村 上 水 軍

二三日で帰る新婚テープ切り

妻病みて婆さん乳房役に立ち

生抜いた欲の皮まで弛みかけ

大阪市 小 谷 葉 子

蒸発したき夜鏡に紅を引き

ライバルにコスモス揺れるだけ揺れて  
理性に負け執念に燃え筆をとり

島根県 小 砂 白 汀

鉄骨を見ればビルとは味気ない  
やりくりを電気鉋のうめき声

八幡浜市 平 田 三 立

ウルサイと叩けば埃立つばかり  
気まぐれが心中にまでのびてゆき

岡山県 瀬 戸 山 文 平

酒乱にもなれずスルメの足を噛み  
いつまでも揺らぐな二人の水鏡

河内長野市 森 本 黒 天 子

物色の座席若さが先へしめ  
小学校では泣かした奴につかわれる

広島県 高 橋 鬼 焼

三十の白髪が妻の気にいらず  
百姓の妻なればこそ雨を乞

新潟県 高 野 不 二

女房の方がたしかな免許証  
日めくりをめくる間もない事務多忙

大阪市 小 東 琴 女

罪なひと男ぎらいにしておかず  
眉ひいておんなは過去へそつばむき

大洲市 堀 内 曉 風

世話好きの自腹切つても批判され  
無頓着そこが社長に気に入られ

北九州市 藤田 独楽

パーティが何時とはなしに腰かけて  
亡母も喜ぶとして賑やかな席にする

宇部市 櫛部 いさ夢

適材は無口な友のブルドーザー  
あとつぎのない紙をすく老夫婦

島根県 石田 清泉

新役員原案どおり素通りし  
田植えすみもう農葉がせきたてる

出雲市 竹内 李朋

明治風物詩

団菊左轍が競う新富座

馬の糞頼み鉄道馬車発車

尼崎市 中谷 利美

禁酒禁煙只今節酒練習中  
風上におけぬ男の逆うらみ

尼崎市 中溪 慶彦

うす着せば風邪厚着なら肩が凝り  
さてどれにしようかサインペン習字

大阪市 梅園 摩耶

母の日へ今年も電報だけを打ち  
山寺の廁はお布施の紙が入り

諫早市 前田 つとむ

栄転の肩書つけて行く僻地  
長生きが母を招いた空の旅

(前月分)

羽曳野市 高橋 竜天

無表情これが仏の顔かいな  
この下へいつかくるのかと墓石なで

羽曳野市 高橋 竜天

放心の煙草の灰ものびるまま  
焦燥をカモフラージュの煙草吸い

鳥取県 川崎 秋女

託児所にあずけて一人の海女になり  
塩辛い乳房へ海女の女の香

大阪市 池田 豊平次

大芝居汚れた足袋の裏が見え  
Z旗の上りつばなしの我が家計

熊本市 北川 一進

食卓がいよいよ小さい子沢山  
取次の電話小指を出して見せ

堺市 高橋 千万子

赤ん坊のペースで我が家明け暮れる  
合槌をうつてさかずき又受ける

河内長野市 井上 喜醉

ノミの音聞いて寝られぬ日曜日  
健康に酒少々は妻も飲み

羽曳野市 河原林 比呂路

日まわりの日に向く親をしたうごと  
裁縫の美しい腕すてペンを取り

鳥取市 小林 由多香

鳴きかけたうぐいすバイクにかき消され

紐解いてといてばあちゃん財布出し

大洲市 横田 放人

おだてたらのる上役で物足らず

療養のベッドへ妻子まだ頼り

大阪市 武居 寿美司

ここ痛いあそこが痛いといまがあり

金魚鉢らんちゅうおよぐにぎやかさ

竹原市 脇本 政己

神の慈悲ここで休める風邪を引き

民主主義僕は手ぶらでついて行き

京都市 菊沢 破天

振りあげたげんこのやり場を選ぶこと

性は善われにかえつて手を見つめ

札幌市 河本 雪男

ママを待つ鍵つ子夕陽に染まつてる

たつた一日テレビのない日を話題にし

竜野市 森下 峰子

開店の初日レモンの輪が太い

死ぬ程に好きと明日ある人が言う

大垣市 池田 和子

うれしさをさつととらえる三面鏡

やかましい雀のデイトで朝が明け

高知県 山川 勝子

うまかつた昔峠のみかん水

内職も時タストがしてみたい

仙台市 川村 映輝

教育ママ子の成長を忘れて居

わがままを言えぬ下宿で母想う

尼崎市 平井 露芳

いい事がありそう指など折つてみる

相手を叩くも漫才芸のうち

貝塚市 行天 千代

長男結婚

新婚の嫁は時計とにらめつこ

カラー写真撮つても味気ない年になり

羽曳野市 大谷 重夫

サンガラスポケツに見せてまだゆすり

富士山もびわ湖も走る新幹線

米子市 林 瑞枝

美しい素顔が惜しいメーキャップ

聞くと嫌聞かぬも淋し母の愚痴

新居浜市 秋月 厚子

象と象鼻からませて楽しそう

一年生新しいカバン夢をつめ

善通寺市 伊藤 歌子

猫の手もほしい農家でばばの守り

妻作はくたびれもうけと愚痴つてる

三次市 和 泉 松 風

身の破滅知りつつ恋の酒を飲み

行く末を案じて母はぐちを云い

鳥取市 小 谷 章 代

亡母の絵がうるんで見える日の孤独  
足音であなたの心察しられ

鳥取市 藤 本 和 宏

総入歯カバツとはずしギョツとさせ

かけ声をかけて寝床を出る佳き日

鳥取市 藤 本 恵 子

ていねいにとわつとけと父は逃げ

深呼吸させて呉れます若葉みち

鳥取市 藤 本 佳 女

アベックへ妬けてるような花が散り

すわり込む前にちよつぱり賃を上げ

鳥取市 藤 本 征 也

素晴らしい敬語の要らぬ奴が来た

まだ居れる彼女の飼猫膝へ来た

高槻市 山 田 ス ミ 子

退け時間何んと多忙な化粧ぶり

親馬鹿を結局子等へ言い聞かせ

大阪市 宮 本 地 楽

未亡人噂気にしてノイローゼ

毒舌へ一矢むくいて席を立ち

泉佐野市 大 工 静 子

田舎者と言われてつくるおはぎ餅

よき嫁は小姑に倍の礼を受け

泉佐野市 大 工 チ ヨ

抱き癖をつけずに育てる若い嫁

織屋の子やかましい所ではよく眠り

姫路市 大 久 保 大 夢 子

寸蔭を惜んでかわるアナウンサー

岡山県 内 海 碧 人

記憶力ない子も田植は期待され

東大阪市 本 多 光 子

洗濯にふとおもいつつペンをとり

大阪市 中 村 年 秋

交通量もう耐えられぬ地下土管

大阪市 藤 田 頂 留 子

朝日座観劇

暗転にCM聞えて来そうやな

中村市 岡 本 香 芳

一円を惜しみて仲買コップ酒

鳥取市 河 口 忠 志

いたずらな子供を叱る眼が笑い

鳥取市 山 本 珂 也 女

麦の穂がゆたかにゆらぐ村祭

鳥取市 山 口 昭 好

うす着して誰に見せる気スラックス

諫早市 原 田 明 春

湯上りの化粧へ電話が邪魔をする

# 秀句鑑賞

—前月号から—

## 後藤梅志

チューリップ誠意のほどのありやし

(薫風)

チューリップは、オランダが本場である。吾々になじみぶかいが、この花は頼りないなせかしら花ぶりも大きく、茎も太いわりにもろい。机の上に挿して置いてもあっけなく萎れしまう。チューリップを前にして、西洋の草花はモロイナと時々思う。その感情をそのまま句にしたのが、この句である。草花の一つ一つに、誠意も求めるのは、人間の勝手というのだが、何物に向つても、誠意をたしかめたくなる此の頃である。歌うより踊るより平和かね 薫風  
三句目のこの句が、作者の感懐であろう。

新緑に酔い酒に酔いバスに酔い

(一栄)

手拍子に作った句のように見えるが、どこかにシンがあるように映じたのは、この頃の観光バスの質の問題だ。生徒も、通勤者も、年寄連中も、よく出養生をしているではないか。街中をはしる観光バスの数はおびただし

い。スキーといわず、梅花の頃といわず、新緑にまでも、観光バスがつづくのである。だから、交通事故が起きても不思議はない。この句は、酔態三様に事寄せ、さりげなく詠んだところに時勢に対する作者の抗議があると見た。

かみほとけあるから地球すばらしい

(靈眼子)

地球を、すばらしいとみるのは作者だけのものであろうか。また、この句は凡想であろうか。一応この疑問は解かねばなるまい。地球は素晴らしい。しかし、人間は幸福になれるほど、不幸になる要素をもっている。決して幸福ではかりはあり得ない。いつの間にか神仏を信するのだが、果して神仏は実在するのとは分かって居ない。人間はいつまでも、猿知恵の範囲を脱し得ないものだ。

ところが、人智の中に、感謝というものがあって、これに気がつく。地球は素晴らしいものとなり、世の中が一変する。作者は、それを云わんとして居るのではあるまいか。

ミスニッポン大和撫子型で来る

(快夢起)

外人の目には、日本女性はいつまでも大和撫子のように、楚々たる姿であってほしいのか、ミスニッポンも云い合せたように、そこを衝いて和服姿で上陸する。実は、その中味は、似ても似つかぬフラッパーであっても、かまわない。だが然し外人の鑑賞眼は、日本人以上に勝れていることを、ミスニッポンは知っているだろうか。あぶない、あぶない。この句は、外地同胞の瞳に映じた、ユーモラスな、一つの警告かもしれない。

ライバルにしておりますと握手され

(蘭幸)

青年作家の句としては、老巧な人もこれかと思ふ作句。内容どことなくほほえましい。ライバルというものは、人知れず爪を磨ぐものだが、面と向ってこんな風に握手を求められては、よくフエアプレイで行こうと、快く手を握り返したことであらう。句は少しも渋滞するところなく、風格が出ているように感じた。

バドミントン看護婦さんの鼻の穴

(満潮)

満潮さんはノイローゼで、もう四か月あまり入院しているが、その病中吟としてのこの句は、さすがと膝をうつものがある。看護婦さんの、鼻の孔に気がつく人は、めつたに居ないだらう。そう云えば、バドミントンをする姿態は、一様に上を向く。こんな

ことを思わせて、取りすました看護婦さんが嬉々として戯れているさまが目につく。

ノイローゼ療養中に、大きなヒットを放つてくれた。鼻の孔、がすばらしい。

### 文無しになって治ったノイローゼ

(満潮)

ノイローゼという病気は、仕事のことでも、暮し向のことも考えないで、吾気に構えて居れば、いつかは治ってしまう病氣らしい。羨ましいと思うのは他人の眼で、その実は、仲々吾気にはなれない。一進一退で、漸く退院が近づいて来たところ、財布は空らになつて来たと言ふ、笑えない事実である。

豆秋さんもそうであったが、川柳家の心境には、ムゲに人の恩恵をうけ入れることを快しとしない、頑固さがある。

「文無し」という一語が、これほど悲痛に響く句はあるまい。而して彼の心境は緯々。

### アベックも釣師もねばる春の土手

(素身郎)

春の堤防風景をよくとらえた。

アベックは恋を遂い、釣師は無心に、魚のゆくえを逐う。どちらも春の陽をあびて、ふり向こうともしない。コントラストがはなはだ妙である。どっちが先に気がつくかなどと興味もたれる。

この句の「ねばる」も、取って付けたようではなく、すべて句の中にとけ込んでいるのは老練というほかはない。

### 口しめす程度に飲んで旅ひとり

(静水)

地味で、少しもケレン味のない作句だが、「旅ひとり」が句を引き締めていて、作者が何かの要務を帯びているのが分かる。

旅さなかの独酌は、思わず過ぎ勝ちのもの。かろく飲んでおいて、事務万端、滞りなく済まし得る人は、森の石松にならずにスム。作者も相当いけるほうだろうが、どこことなく風格の出た句。

### 痛くないバラの新芽の刺を撫で

(いわを)

作者の神経は、極めてこまかい。かたい先のとがったバラの木には近づこうともしない人らしいが、新芽の、やわらかい感触には、魅せられるものがあって、近寄ったものか。人間の五感のうちで、触觉というものをだいにする人は、文化的の仕事に従事する人におおい。触觉はまた、聴覚にもつながり、音楽家などは、触觉には、極めて鋭敏だ。この句は、やわらかい感触で包んだ、ほのぼのとした感覚句。

### 眼を閉じて過去ふりかえる霧の庵

(句案坊)

人が自若として眼を閉すれば、そこには真如の(雑念を脱した)世界があると聞く。智能は他の動物に勝って居りながら、馬や鼠の靈感にもおとるのが人間の習い。それが死の寸前には、雑念から切り離され、不思議な能力を発揮するものである。目に見えぬものが見える。なんと驚異すべきことではないか。

故郷で遊んだ、蜻蛉のとまった垣根まで記

憶する精神力というものに、こころの偉大さを知ることが出来る。この作者は、既に悟つて居り、従つて「霧の庵」は蛇足である。

### 童心にかえる砂丘の足の裏(葉子)

この作者の成長ぶりは驚異に価する。「童心」という文字が、生き生きとして返つて来る。砂丘という広い砂原が目に見え、靴を脱ぎ捨てハダシになつて、嬉々として歩む姿がハッキリ見えてくるではないか。

足のうらは、どんな色になつてゐるか。きつと熱い砂で、マッカになつてゐるだろう。

### 白紙凝視喜怒哀楽の無尽蔵(不朽)

白紙には何も書いてないが、思念を凝らして見ていると、もろもろの喜びも悲しみも渾然一体となつて迫ってくる。恰も座禅の僧侶の頭の中と同じものだ。但しこれには大分脩業がある。ただぼんやりした頭で凝視したところで、眠くなるばかりだ。しかしこの句の通りであることに間違いはない。

云うは易く、行ふは難いということを、この句は、訓えているようだ。

# 戦争と川柳

## 小川静観堂

私は家系と教育との関係で幼少の頃から軍人を志した。そして陸軍々医となった。折柄第一次世界大戦が勃発し、日本は独逸に宣戦を布告して所謂日独戦争になった。私は工兵独立大隊附軍医として夢中で働いた。そして日本国中の新聞が勇敢なる小川軍医を報道した。それに味を占めたというワケではないがその後事変の起る度に必ず志願して出征させて貰った。

シベリア事変、満洲事変等々。私は満洲の旅順陸軍病院庶務主任として勤務中支那事変勃発のため関東軍臨時衛生班を編成して出動し、山西省太原攻略戦に参加し、旅順に凱旋して間もなく蒙疆張家口陸軍病院長に就任した。張家口には岩崎柳路氏がバーを開いて居られた。そこで漫遊のため遙々と来られた路郎先生にお目にかかり、君は見込みがあるから大に川柳したまえとおだてられ、川雉へ送句して御鞭撻を受けたものだった。然し結局は先生の御眼鏡違いでお見込みを裏切って七十八才、お耻しい次第である。終戦後私が伊丹に移り住み開業して間もな

路郎先生がヒョッコリ訪ねて来られただもう嬉しくて戦争の話が弾んだ。その頃私は頼と句を顧みなかったので句の話が出そうになると盃を差してその方向を更えたのは慙愧の至りであった。

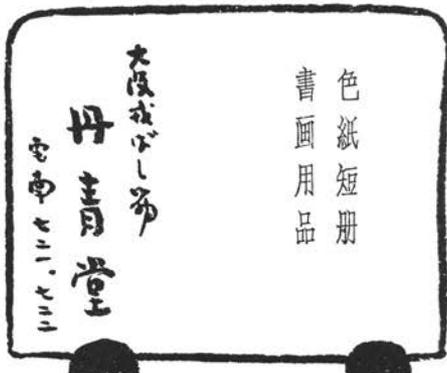
北蒙古のノモンハン戦争で日本が敗けたので、私は急遽北満ハイラルに飛んで大病院をつくって毎日毎夜後送される傷病者を収容治療したのであったが、結局は負け戦に終った。

ハイラル陸軍病院にも路郎先生が遙々来られ川柳による患者慰問をして戴いた。誠に夢のような思い出である。何しろ先生と私とは同じ年齢なのである。もはやお目に懸れぬ。

それから間もなく私は姫路師団軍医部長として内地に帰還を命ぜられた。折角北満国境でいい気持ちに浸っていたのに女房を連れて内地へ帰るのは残り惜しい気がした。暫くすると遂に大東亜戦争に突入。私は家に後顧の憂がなかったので、適材適所と自惚れていた職務が恋しくなり、遂に陸軍省へ手紙を出して支那でも南方でも何処でもよろしいから戦地の部隊長に出して呉れと願ったところ、折り返し返電が来て、仏領印度支那(今のベトナム)サイゴン陸軍病院長として直ちに出發せよであった。

この志願は、軍医部の部下にも、女房にも内緒であった。約半年後に、女房へ出した手紙の端っこにその事を書いてやったところ、女房の返事は、まことに御希望どおりで結構なり、患者さんを大切に上げて下さいと

色紙短冊  
書画用品



ばかりで、大酒をせぬようとか、仏蘭西人と浮気をするとかは書かれてなかった。ウチの女房はコンな女だった。

サイゴンは東洋のパリと言われるほどの美しいところだった。その頃ベトナムは居なかつた。一年ほどしてジャワ、スラバヤ陸軍病院長として転出した。ジャワ島は世界の楽園地と称せられるほどの桃源郷だった。

敵機の来襲も受けず、戦争のコワイ事も知らず、只もう一心不乱に院務に精勤し、英仏軍の上陸作戦に対応する研究をした。ところが、おお神よである。敗戦である。そして約一年間の刑務所生活の後に階級章も軍刀もピストルも聴診器もナイフ、フォークも川柳覚書

の手帖も取り上げられて帰国した次第なり。

いっそちぎるうかシャツのぶらぶら鉤  
どこへ征つても手から離せぬ蠅叩

南十字高くシロンの並木道

ブンガワンソロ黄色い恋をするところ

敗戦に死ぬべかりしを喜寿の破目

(元陸軍医 大佐)

戦争

福井野迷路

日露戦争では日本海々戦大勝の時、私は京都で同志社中学生として旗を振って街頭をねり歩いた位のものである。日清、日露両戦役は地球儀で見ればほんの小さい局地戦に過ぎなかった。

第一次世界大戦の時は例の独逸巡洋艦エムデン号が太平洋をあはれ廻っていた頃、英国のエリザベス女王のお爺さまの弟コンノート大將殿下を巡洋艦霧島に乗せてカナダのエスカイモルト軍港へ護送したのが一番なつかしい思出である。

第二次大戦の起こるまでは、満洲事変、日支事変(泥沼戦)丁度今のベトナム戦、中東戦のような局地小ぜりあいがあつて、いつも

日本が主導権を握り欧米先進国に白眼視されて居た。

当時の日本陸軍もそうだったが、海軍でも兵器は大きい程強い、大鵬、柏戸式だった。とほうもない大きい軍艦をこしらえて居た。当時の川柳に

大艦に巨砲長城にピラミッド

と云う有様だった、も一つ云いかえれば

大艦に巨砲恐龍にゴジラまで

と云う風に科学の進歩は進歩だが前進か後進かわからぬ有様だった。

当時科学の国独逸ではユダヤ人学者の間で極小の理論物理が研究されて居た。この原子核研究のユダヤ人学者グループはヒトラー総統の弾圧を知つて第一次大戦の初めにいち早く自由の国米国へ逃げて行つた。米国ではこれら学者を厚遇して僅か六カ年弱で原子兵器を完成した。戦争科学は大艦巨砲

のよいとまげ作業よりも極小の核物理の方に加担し、昭和二十年八月六日世界で初めて原爆が広島上空に終戦用として投下された。

戦争毎に科学は躍進する、今や核反応は和戦両様に実用化が進んで居る。第三次大戦が本当に起きたら地球上の生物の或る部分を全滅するからその實際を身をもって知つて居る米ソ両国は小児の火遊びを警戒(核拡散防止)して居る。

今日世界各地でおこる小ぜりあいは相撲の十両試合だが愈々三役登場

ともなると所謂ボタン戦争で一日で結着(ステリリザチオ、マグナ即ち生物の大消毒)となる危険さえある。第三次大戦は果して起こるか又は賢明なる外交折衝でくいとめられるか、人類社会のイデオロギー論争の代償としては余りに悲惨な運命をもつ第三次大戦の行方は神のみぞ知るのである。  
(終戦時呉鎮守府軍医長兼呉海軍病院長・元海軍軍医中將)

将校第一回召集

藤本 礎山

松坂屋友の会 ■ 6階クラブ係

カトレヤクラブ

会員募集

お買物資金の積立に  
おたのしみがプラス  
講習会・観劇・レクレーション  
展覧会などに招待

会費 1ヵ月(110)・1,000円

お買物票 満期時に会費相当額をお返しします

大阪天満橋 松坂屋 942-2201



新たな生活

召された日の特命をうけたる者、  
草いきれ強き河原、荒れ果てた土手、  
陽はサンサンと焼けつき  
呉鎮、舞鶴、北支等々  
番号だけで呼ばれる生きもの、  
まるで罪人ででもあるかのように  
一列に並ぶ尉官二十四名  
やがて……一三三四五号!!  
ハイッ!! やっぱ罪人だ?  
『内地勤務補官を命ずッ』:ハイッ!!  
ヤレヤレ内地勤務……。トラック便乗  
故も知らぬ涙がポロッと落ちた、  
立ち並ぶ灰色の屋根  
野中に延びる一本の道  
之等をそこはかくと見るとき  
まるでからだがかくずれるように思えた  
憂愁を滴たらせている幾十の屋根  
未開の地をゆく惨めなる亡霊、  
こうした無意味の日毎を眺め  
その下に住む人々の交わりを想い  
俺はもう、駄目だと思った、  
もうお終いだ、と、カンネンした、  
しかし新しい生活に入った  
唯いそがしく過ぎた二三日  
ふと気付いた朝日の輝やき  
涼し風が訪れる爽かな朝食の後に  
私室の窓から見る四方の朝やけ  
南東の一角に、頑固な俺の親父のように、  
あの白き屋根は控えている、  
俺は思わずヒョコンとおじぎする

やはり来てよかったとも思う  
向うの広場に幾百の足音が響き  
足歩行進の彼方の屋根も  
どうやら牡牛のようにむくむくと生  
きてるようだ  
そして今、眼前にはジュラルミンの  
文化が  
立派な記録をのこして横たわってい  
る  
それ等には何時でも飛ぶべく  
国運をかけた電流が通じている、  
今、俺の脳も眼も、手も足も  
何と愉しげにしびれている事よ!!  
そして俺の周囲にはジュラルミンの  
大鳥が  
何と沢山待機している事よ!!  
俺の心は俺に、そっと囁いた、  
貴様は今俺達の中から  
俺達の理想と使命の為に  
あのジュラルミンを征そう、とするのだ、  
俺達の祖国の為にたとえ  
悪結果であったとしても、  
俺達は日本の精神の為に  
先輩が血と汗と肉体を散らした  
その戦いの中に飛び込んでゆくのだ、  
貴様のあれ程愛した画筆に変えて  
一機のエンジンに身を投げ預け、  
俺達日本の肉弾となったのだ  
俺達祖国日本は  
新しい世界史に向って進んでいるのだ  
カーキ色の検査服の内側から

GOLDEN  
O.S.K

の紳士服  
スマートで  
着心地のよい



株式会社  
オーエスケー

何ものをもはじき飛ばすような  
すさまじいキハクがホトバシル、  
貴様が百八十度変った人生に  
恐れ気もなくぶつかってゆく態度に  
俺は愉しく別れてゆく事が出来る  
美事な朝だ  
貴様と別れるにはほんとうにふさわしい  
どうしても戦かわねばならぬなら  
貴様の火薬を想い切って  
相手の横っ腹に炸裂させて呉れないか  
俺は唯黙って  
心の囁きを聞いている  
▼おわび—  
編集の都合で「運・不運」西田柳宏子氏、  
「仏印作戦に参加して」金井文秋氏、「終戦  
再出発とシベリア捕虜」奥谷弘朗氏、「軍人  
通訳誕生」辻白溪子氏の原稿は次号発表

(元海軍将校)

## 近 詠

大阪市 橋 本 緑 雨

鯛の膳今日は何の日かいな  
商談が出来そうで二合瓶提げて行く  
テープの長さこれで人生終りなり  
幾度も仆れ長命の医を呼び

須坂市 高 峰 柳 児

バラ銭の日銭まっすぐな歩調  
押し出しの人事頬冠りして甘え  
あの坂もこの坂も郷愁くすぐられ  
ヘルメット冠ると親方疍だかい  
廊下導かれ陳情腰くだけ

今治市 月 原 宵 明

あいの児の父輸送機で征ったきり  
水中花みたいコップにある入歯  
実印は見事払わぬ手形さる  
養老院ああ人生のスクラップ

## 常任理事会

七月四日午後六時から  
本社で常任理事会が開かれた。まず松江梅里氏の急逝で参集する方々も憂色濃いものがあった。八月号は松江梅里追悼号に切りかえられていたが、七月二十日六時から大萬で追悼句会を本社が主催することに決定。

## 「川柳塔賞」の 選考委決定

清水白柳・市場没食子・橋高薫風・戸田古方・正本水客・川村好郎・菊沢小松園七氏。  
昨年十月号から本年九月号発表の近作柳樽の作品から各選考委員が候補作十句宛持ち寄り九月三日の理事会で栄光の一句を決定。  
出席―白柳、栞、生々庵、多久志、文秋、好郎、一三夫諸氏。―  
八時閉会。

セドリック  
ブルバード 乗用車専門販売店

# 尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若 本 真 彦

本 社  
尼 崎 市 尾 浜 下 ノ 川 434  
TEL. 大 阪 (481) 5681 (代)  
神 戸 営 業 所  
神 戸 市 長 田 区 二 番 町 4 丁 目 2-1  
TEL. 神 戸 ⑤ 代 6725  
明 石 営 業 所  
明 石 船 上 硯 町 8 2  
TEL. 明 石 ⑨ 5834

加古川営業所  
加古川市米田町船頭591  
TEL. 加古川 ② 5526  
姫路営業所  
姫路市市川橋1丁目13  
TEL. 姫路 ② 6145・7820

# 初歩教室

題 — 「壁」

## 菊沢小松園

壁にも色々あって、物の壁と、心の壁、社会の壁、事業の壁、いろいろある。句主がよく把握された壁の百体を見せて貰った。

壁一重合図の音を派手に出し

松風

結局は世間並にする壁の色

要次

用心をすれば良かった壁に耳

徹他

白壁に影をうつして鬼ごっこ

寿美司

第一句、子供の遊びの情景か、音を派手に出したところが子供っぽい。第二句、色々と迷った結果が、一般向きの壁の色に漸く決めたところ、常識人の面目が躍る。第三句、聞かれてからの後悔の状はよく判るが、誰もか思い付くところで損、常套と云うより他ない第四句、悪役は余り席の真中にでんと構えては居ない、この句の行き届いた観察を、日常の見通し安いものを注意力で句にした御見事というより他にない。第五句、幼時の思い出から句にただで此の程度はこの人にしては物足りない。

壁の色かえて見ようか倦怠期  
貧しくも風雨さえざる壁があり  
壁の落書きのままにして鉄格子

美巳代  
同  
すき

思春期の壁いっぱいのプロマイド  
病床に壁の白さが必みとおり

同代

第一句、結婚十年御互に夫婦生活に慣れが来て日々の張りも感じも事務的になる倦怠期である、目先のちよっとした些細なことが、二人をほっとさせる、殊に子供のない夫婦と見たら一層この小さな努力をほほえましく窺える。第二句、苦勞人の小康を得た生活に感謝の気持ちがよく出ている、足るを知る心は幸の源泉である。第三句、暗い気持ちで部屋への落書き、消すには惜しい名文もあろう、切破つまった鉄格子の中に人間の裸の姿がある暗い句だが真実がある。第四句、これは明るく、だがよく何処でも誰でも、初手に思い付くところで損、もっと突込んで詠んでほしいこの人にはもうこの句境はすでに卒業して居られる筈。第五句、病床の句は多かつたが、僅かにこれが目立った、殊に下五がよく感じが出ていてよい。

母を待つピンポン壁へまだ続き  
病床の青春壁のプロマイド  
壁かわく間も待てず式を挙げ  
愚痴みんな吸い取ってくれる壁があり

瑞枝  
同  
千梢

現実と思わぬ壁に突きあたり

八郎 亜也

第一句、一人母を待つ間に壁を対手にピンポン玉で遊んでいる、下五で掃りの遅さを示している、鍵っ子と見れば哀憂が一入だ、第二句、前のプロマイドの句より若い病人を詠んでいるのでやや深味はあるがこれと現象だけでもっと句主の顔を出してほしい、感じ方が句の上に現れたらとおもう。第三句、住宅難時代の結婚式が窺れてほほえましい、時代に対しての慎ましい作者の抗議でもある、第四句、病床生活にある句主の偽わらざる告白でもある、中七にこの句の本命がある、第五句、世相は思い通りには行かず、八方に壁のある世の中である、上五の堅さを何とか現象に変える努力がほしかった、この儘では生硬の譏りは免れぬだろう。

厚い壁破れて質上げものになり

誓二

白壁に影をうつして鬼ごっこ

寿美司

カーミア買えぬ車を壁にはり

花子

壁のしみ恋しく人の顔に見え

頂留堂

新婚は間もなく壁の色を変え

頂留堂

第一句、これは世上の壁である、資本家の防壁も労働者の攻勢に抗し兼ねて城下の誓いをさせられたのである、下五で労働者側から詠んだことが判る。第二句、これも残念ながら浅い、もっと突込んだ句がこの人には詠める筈、あまりにも楽に作られている。第三句、これは面白い、買わぬとあったが買えぬの方がよい、現実の壁もなかなか皮肉。第四句、恋は発明家でもある、壁の汚点からでも人間

の顔を想像する。第五句、新婚の工夫は壁紙の色を変えて見るのであろうが浅い句境。

女でも塗れる壁にもひまがり 保夫

ここに壁あるとは金魚膳におちす 重夫

壁土の下塗のまま梅雨になり 比呂路

豊か下壁のよこが目立ち出し 湖平

農地売れて白壁の倉ガレージに 湖平

第一句、宣伝広告の矛盾を突いて面白い、う

たい文句にだまされた顔が見えるよう。第二

句、純情な金魚には壁のあるのが不思議、何

んどしても初心者には世の中のからくりが腑

に落ちない、世知がらい社会を諷刺していい

句になった。第三句、普請が遅れての壁下塗

りまで梅雨になった、思うように捗らぬと

ころに苦勞もあるというもの。第四句、畳を

変えて今迄気が附かなかった壁の汚れが目立

## 近 詠

小松市 山上千太郎

人間を古稀までつとめた人臭さ

二日酔いこれも勤めのうちなるぞ

なにか一日追われるように無為にすぎ

今治市 長野文庫

すっきりと酔う割勘の気持よさ

忙がしい市長動かす秘書のメモ

掴まっているのに目高嬉しそつ

つ、思うこと一つ叶えば又一つで欲望には切  
りが無い。第五句、農地を売って、白壁の土  
蔵も自家用車のガレージになったというので  
ある、俄大尽の急変ぶりも面白い。

白壁で育てられたに今日を詫び 破天

修学旅行母校の恥を壁に書き 句楽坊

反抗へゆっくり祖母が壁になり 清泉

壁一重となりへ新婚うつてき 同

赤土も踏まれふまれて壁に生き 季生

第一句、過去は何うあろうとも現在は、白壁

の堂々たる家で育てられた親達にも済まない

との述懐、暗い句柄ながら長い経過を纏めた

苦心を買いたい。第二句、修学旅行の元氣さ

から地まで壁の見さかぬなく落書にさえ学校の

所在りまで壁の連想から築書母校へ発展させ

たところが面白い。第三句、祖母が思春期の

上田市 金子呑風

蕪佃高林橋成金みくびられ

急行をいっそ嫌って旅愉し

名古屋市 長谷川 鮮山

生涯の起伏ドラマに似てる過去

逆ろうて来た愚るかさが今判り

宝籤五枚めくめている財布

和歌山市 秋月 宏方

センスない店だと思つ包装紙

遊ぶことばかり考え観光課

反抗へ経験を生じて相談になってやって壁の  
役目になってやると云う、心の壁である。第  
四句、新婚の隣の部屋で寝苦しい、と同巧で  
浅い句境、浅い。第五句、田舎の情景か、  
壁土も手近の山土で間に合わすのであろう。

ほめられて壁のおばQ僕かいた 正朗

壁新聞若い力のゆれ動く 同

自信たっぷり風呂場の壁がうたになり芳子

壁に耳アバウト鉄筋になったけど 千夏

壁に背をつけて反抗まだ続け 紫子

聞くつもりではなかったが壁一重 同

怪談は壁の中から見つれる 同

第一句、無邪気さは褒められるとすぐ告白

する後で叱られるのも忘れて、おばQを持っ

て来たところが面白い。第二句、中国の壁新

聞のこと、座五に僅かに作者の顔が出ている

時事吟として頂く。第三句、風呂ではいい声

で聞えるので自信も出来よう、上五の説明が

勝つて句を軽くした。第四句、鉄筋になっ

ても、従来の人間と変らない、一面は確かに

掴んでいる。第五句、これは佳句、追い詰め

られた気持が上五でよく出ているし、座五の

まだが無駄な反抗を示している。第六句、よ

くある句境、浅い。第七句、壁の中に塗り込

められた屍体の乱歩の小説を想わず、類想の

ないのがよい。

壁一重銀行に金うなるほど 小松園

九月二十日締切 十一月号発表

題「時間」

宛先 大阪市阿倍野区王子町四丁目番22号

菊沢小松園

大萬川柳

辞退

入選発表

入選者 清水白柳  
八十七句

倉敷里風  
辞退した椅子ライバルが背をそらし

大阪 頂留子  
リベートを辞退すよなしないよな

加賀 一路  
斗酒辞る報いカメラに胃を撮られ

鳥取 法泉子  
辞退する筈が抱負を語りだし

大阪 徹也  
辞退する一人に数えられていた

堺 慶之助  
いいにくいと言っだけ言っ辞退す

出雲 李朋  
満場の拍手辞退に踏みきれず

和歌山 木魚  
辞退してほしい会長やりたがり

鳥取 佳女  
辞退するすきを与えずまくし立て

大田 軒太楼  
妻の目のシグナル辞退すると決め

西宮 千夏  
辞退さゆずり合うまに割り込まれ

大阪 鉄児  
辞退さすかけに黒幕動いとり

米子 千代  
もう一度来ると見越して辞退する

岸和田 千舟  
見送りを辞退駅への道迷い

出雲 健太郎  
肩書の辞退すすめる聴診器

大阪 一栄  
二度三度辞退する子の小憎らし

加賀 光郎  
勲記など何するものぞ天の邪鬼

姫路 芙巳代  
一応は美德の控辞退する

大阪 静波  
辞退した夜は勲章の夢ばかり

尼崎 としみ  
辞退すチャンス逸して酔いつぶれ

香川 醉夢  
母の会上座辞退のかしまし

富田林 東雲楼  
公害地惜しい栄転辞退する

宝塚 ゆきを  
金の要る仕事と聞いて辞退する

西宮 玩柳  
褒賞を辞退してから筆が冴え

堺 亜也  
あて馬に辞退とふんで推せんし

岡山 照路  
辞退する頃と妻の手つめりに来

大阪 誓二  
見送りを辞退しいしい駅まで来

呉 甍光  
結論は聞かずに辞退決めている

福井 雅城  
立候補辞退運動員あわれ

福岡 湖平  
仲人は辞退しますが橋渡し

岡山 一声  
役員は辞退援助は約束し

堺 一扇  
もう辞退出来ぬとこまで進んどり

鳥根 清泉  
辞退する口実仲人委される

今治 青女  
辞退する人を拍手できめちまい

名古屋 千久良  
一べんは辞退しますのやと母教え

大阪 双楽  
汐時を得た辞退にてよろこばれ

伊丹 千尋  
腹の虫押えて昼を辞退する

大洲 暁明  
身を引けば何とかなと言っただけ

大阪 弘生  
蠅とまった菓子と言えずただ辞退

富田林 花梢

すばらしい  
着心地



蝶矢  
シャツ

美辞麗句並べ封書で来た辞退

たって言うなら承る気です先ず辞退

要職を辞退の父はどっと老け

革新の議員が辞退する与論

玄関に立って辞退の肚をきめ

辞退してあわてて帰る忘れもの

目くばせをして辞退するタイミング

押し問答の果て水引きはずり下り

辞退する事を知らない自信過多

空岡 忠三  
辞退した品を後ろで子が覗き  
大阪 章雅

岡山 幽谷  
役辞退して来なはれやと靴すべり

大阪 恭太  
飛行機が鬼門で外遊辞退する

鳥根 正朗  
座ぶとも辞退つき合いにくい人

鳥根 芳子  
酔わされて辞退の出来ぬ破目に

大阪 十悟  
ひま人と見たか辞退を受け入れず

岡山 十九平  
お招きを辞退して行くものがない

藤井 寺  
多数決辞退許さぬ民主主義

堺 一舟  
お愛想で言うこのこついで来る

大阪 美房  
辞退せず同額の品返して来

石川 宗太郎  
相性という迷信で辞退され

大阪 没食子  
栗田につながりそうもなく辞退

大阪 水客  
辞退しても辞退とも町会長さされ

大阪 弓彦  
栄転を辞退してきて妻看とる

米子 花子  
診断書添えた辞退にあきらめる

空岡 要次  
くり返す辞退に氷溶けかか  
辞退など聞かず山盛り又すすめ

小松 弘美  
良縁を辞退した客出来ており  
抜てきを辞退してまで恋に生き

鳥取 征也  
辞退してよかった旅の事故を知り  
思惑の辞退あっさりみとめられ

鳥取 和宏  
辞退して切ねてるように扱われ  
飲む方の胃は別にある辞退せず

大阪 あいさ  
ご辞退をまとは替りがないと見て  
厚意だけ貰っておくと辞退され

倉敷 素身郎  
口先きの辞退と知って無理におき  
三度目はもううつもりで辞退する

大阪 春果  
二次会は辞退病妻待っている  
辞退してなんの野心もない昼寝

大阪 恵二朗  
座ぶとんの端で辞退はかしまり  
雀友が待っている辞退とも言えず

岡山 旭峯  
入れ知恵の通りに辞退して戻り  
五客

大阪 継之助  
口下手の辞退とうとう手を合わせ  
敗北の予感があつて辞退する

岡山 旭峯  
辞退してもポケットへねじこまれ

大阪 水客  
両手あげて冗談めかしておく辞退  
無報酬だからこそ辞退せずつづけ

鳥取 秋水  
人ノ句  
尼崎

空岡 要次  
辞退するどころか夫婦連れで来る  
地ノ句

大阪 静波  
内職で生きる決意の扶助を辞し  
天ノ句

一 美房  
失礼じゃないのと妻は貰う肚  
大萬ベストテン(七月現在)

二 梅里  
一〇、〇 富田林

三 清人  
一〇、〇 東大阪

四 一舟  
九、〇 堺

五 弓彦  
九、〇 大阪

六 要次  
八、〇 空岡

七 健太郎  
八、〇 大阪

八 きさ子  
七、〇 出雲

九 春巢  
七、〇 岸和田

十 琴女  
七、〇 大阪

十一 亜也  
七、〇 堺

十二 柳志  
六、五 大阪

十三 文秋  
六、五 大阪

十四 醉夢  
六、五 香川

みんなの暮らしが明るくなる  
セキスイのプラスチック

積水化学  
本社 大阪市北区岸星町1

十九 幽谷 六、五 岡山  
二〇 滋雀 六、〇 大阪  
以下略

▼主催者松江梅里氏の急逝で一応  
ピリオドをうつことにになりました。  
長年月のご支援を厚くお礼  
申しあげます。川柳塔社  
▼新川博也氏(大阪府同人)の新  
住所は高石市西取石一―二―  
三二。同人名簿脱落深謝。  
▼同人名簿木山一路は木村一路。

海

小林孤呂二選

面白いように海の子よく泳ぎ  
お臍までだして泳がぬ海に来る  
海の家もう満員と云う便り  
海見てる時は借金など忘れ  
のり遅れ海見おろした駅でまち  
民謡も積んで隠岐の海渡る  
分譲地一目で海が見おろせる  
海へ来て水着濡さず日焼して  
荒海が削ってくれた景勝地  
ちっぽけな理窟をぬいて海を見る  
丸い島海へ茶碗を伏せたよう  
たまさかに見れば海へ湧く詩情  
海で得た恋秋風と共に消え  
領海を勝手に決めて横車  
孤独に耐えて少年海が好き  
愚痴すててしまえと如し海の碧  
警備艇横ににらんで海に生き  
観光の海は緑の島を縫い  
明日あるを信じ夕日の海にたち

海原を迷わず戻ってきたつばめ  
汐ざいに誘いだされた宿の下駄  
日本海裏庭にして子が育ち  
熱帯魚南の海を恋しがり  
灰色の心へ海も騒ぐだけ  
海見えて海の広さに包まれる  
中耳炎海が嫌いな子に育ち  
起伏して砂丘の果は海に入り  
そういえば海のまるさが見えて  
松林逢えば海あり試歩の道  
海のない国に育って海を恋い  
山陰の海を見て来た蟹を提げ  
年賀だけ書く硯石海凍る  
柴 惠二朗 秋女 李朋 清泉 可住 秋月 千代 古方 千翁 十九平 初甫 どんたく

寝言

江国幽谷選

疲れてる妻の寝言だほつこう  
寝台車寝言へスリがスリそこね  
不覚にも寝言で嘘がみんなばれ  
子が真似た寝言へ面子まるつぶれ  
寝言云うことは仲人から聞かず  
旅先で寝言のくせを見つけられ大江秋  
お念仏祖母は寝言にまでとなえ  
寝言まで云うて自転車買わされる  
いじらしい寝言前髪撫でてやり  
とりかえしつかぬ寝言を妻がきき  
寝台車上のお客が寝言云い  
寝言でも勉強している一年生  
聞きすてにならぬ寝言をゆり起し  
寝言のような答弁野党いきり立つ  
いびきの谷間を縫うて出る寝言  
手枕の坊や寝言に目をさまし  
信じてはいるが寝言が気にかかり  
笑ってる寝言の孫を取り囲み  
気味悪い美人の寝言まだつぶき  
子を叱る妻の寝言に起される

祥月 無聖 一扇 露声 和宏 壯樹 齊花 勝子 晃男 木魚 文平 季生 七面山 藤波 杜的 二三枝 健太郎 代仕男 醉夢 天 宗太郎 双楽 杜的 宗太郎 文平 慶彦 素身郎 祥月 双楽 独仙 保夫 千翁 李朋

課 題 吟

一言の寝言気になることを云い  
六十になつて寝言で母を呼び  
無 聖

黙否権寝言でしゃべつたのは知  
秋 月

わからんさかい寝言おもしろい  
古 方

本心の先がのぞいてゐる寝言  
千 翁

寝言からもう子供ではないと知り  
い さ 夢

泣いてゐる妻の寝言がききとれず  
芳 子

雄大なプランを寝言にしてしま  
十 九 平

証拠とはテープにとつてある寝言  
七 面 山

睡まじく寝言を語る朝の膳  
藤 波

寝言と呼んでゐるのとよろこばせ  
頂 留 子

佳

先妻を慕う寝言が胸を刺し  
独 仙

天井のねずみ走つて寝言止み  
重 夫

云いにくいこゝ寝言にしてしやべり  
珂也女

クロールの型で寝言が向きをかえ  
恵 二 朗

二階まで起して寝言よく寝入り  
千 代

人

寝言云う顔へ叱つたことを悔い  
健 太 郎

寝言泣き出して起こされる  
芳 仙

地

肝心なとこだけ寝言訊きとれず  
露 声

軸

寝言ききましたよと内容にはふれず

表

工藤甲吉選

表ばかり見ている政治気にくわず  
雄 声

表には出せぬ男の意地があり  
弘 美

表面はおとなしそうなボスの顔  
重 夫

表向き秘書にしておく娘を雇い  
木 魚

表門今日はあいてゐる弓の会  
初 甫

つくろつてみせても二号と知れ  
可 住

頑張りが表通りへ店を出し  
竜 天

表門仁王のおわす位置があり  
杜 的

お天気は下駄の表へ頼まれる  
李 朋

約束が違うと表沙汰にされ  
利 美

つつましいプラン畳の表替え  
紫

表から頼み裏口から届け  
恵 二 朗

表情も交えず毒舌おとろえず  
秀 峰

表だけ閉めて昼寝の一家族  
い さ 夢

表から来る客質屋儲からず  
慶 彦

表替えして出稼ぎの夫を待ち  
鶴 丸

表戸は今日が始まる音であけ  
無 聖

透かす透かす紙の表をたしかめる  
古 方

表向きは会議芸者も呼んでゐる  
素 身 郎

九回の表応援湧き返り  
ろ 亭

表情を読みつつ策士策をたて  
七 面 山

表札が変わつてからの琴の音  
芳 仙

裏口へ廻れば表あけてくれ  
露 声

表向き兄妹ですと眼を盗み  
清 泉

その裏をのぞかれそうな表門  
千 翁

現金封筒表の方で封をする  
齊 花

赤表紙手に大学の門を出る  
光 道

仁王さん表門からいらんでる  
恵 子

表まで見送り話まだ続き  
失 名

子を叱る声が表へ筒抜ける  
芳 子

佳

あらためて表へ廻るよい話  
旭 峯

表から見ればびくともせぬ老舗  
宗 太 郎

子沢山畳の表すり切れる  
勝 子

表から来た親友を不審がり  
千 代

おえら方表筋だけ見て通り  
醉 夢

人

表には見せぬ優しい親心  
軒 太 楼

地

二代目の苦勞は表通りへ出  
不 二

天

表戸をとぞし噂の中にある  
秋 女

軸

表から一人の朝を起こされる

平安川柳社創立十周年記念明治百年  
全國川柳大会で見事市長賞獲得の正  
本水客氏(薫風撮影)



▼路郎忌本社句会は七月九日(日)午後一時から千日前の自安寺で葎乃女史を迎えて薫風盛大に開催された。松本市の石曾根民郎氏ほか各地から百名のご出席があり、閉会後喜楽別館での晩餐会にはほとんどの方がご参加くださった。

▼松江梅里氏(本社副理事長)の急死は痛恨の一語に尽きる。「始め何のことか判らず読み下してしました。告別式の文字が目にはいり、もう一度読みかえして見て、一瞬鼓動の止るの

▼故松江梅里追悼句会が七月二十日午後六時から「大萬」で開催。文字どおり寿司詰め六八名出席は、故人の手柄をしのがせ、涙あたたなものがあつた。

▼時の川柳十周年記念事業として募集されていた論説には、番傘の榎本聡夢氏が一席を獲得、作品の特選には川柳ジャーナルの定金冬二氏「金にまけなかつたところ抱いて寝る」と、ふあうすと海地大破氏「学のない父働いたいびきかく」が入賞した。

▼北海道川柳年度賞(昭和四十一年度)は「肩書を取ればあなたの影がない」など五句を対称に山田みゆる氏が受賞、北海道川柳連盟賞は高田光穂、横山穂風の両氏が受賞された。

▼川柳たまし誌は六月号を良寛まつり協賛誌上川柳大会作品集として六月一日に発行、なお米年春創立十周年を迎える。

# 柳 界 展 望

あちらからこちらから  
お便りを待っています。  
(橋高薫風・担当)

冷たさのあるココの  
一本の生灘



酒用冷  
**キンロ**  
醸造酒露金/灘

人を唄んだ。

▼愛媛県の川柳大会は八月六日(日)午前十時から大洲市(大洲)神社事務所で開催。兼題「百年・無神経・もみ消す・後始末・心配・スカート・看板・この次・席題二題・三句宛。投句は中四纏、長さ十八纏の句箋に明記の上、八月三日までに愛媛県大洲市常磐町米沢

眺明宛。

▼傍島静馬氏は砂丘俳画展(朝日文化ホール・七月十五日—十七日)へ力作を出品、なお吉田圭井堂氏も快

作三点を発表された。

▼川岡蠶眼子氏(諫早市同人)は日本創造美術会審査員小柳創生画伯の富士の墨

画に「兒どももみんなこ

うなれ富士の山」を添書さ

れた。

▼麻生アト氏(奈良県同人)は主宰するC・M・C

音楽サークルの発表演奏会

を七月二十五日大阪市立婦

人会館で催され盛況だった

▼天鉄局川柳会(大阪市)は六月十一日(日)浄瑠璃

寺・当尾石仏めぐり吟行へ

▼川柳塔有志の旅は六月二

十四日志摩答志島へ。一行

は梅里・小松園・好郎・栞

・圭井堂・多久志の諸氏。

「絵のような島にて働く人多し(多久志)」

▼堺市教育委員会の成人学

校川柳講座のOB団体、若

芽川柳会は堺市文化団体連

# はげめ・かぶれぬ白髪染 男まえ理容

環状線寺田町裏駅南一丁

での審査に参加された。

▼築山快夢起氏(ハワイ同

人)から「多久志氏のハワ

イ紀行は出色の文章で、不

作法な観光客に対する警告

の一文、正に同感でした」

▼不二田一三夫氏の脚本に

よる漫才が、六月二十三日

NHKから放送された。い

とし、こいし出演の「お笑

いおしやれ専科」に笑いの

渦に巻き込まれた一家、明

湖・正朝・芳子・齊花・東

雲楼・小松園の諸氏から早

速に好評の寄信があった。

▼若柳潮花氏(高槻市同人)

から「眼は全快しました

が、度の強い眼鏡に馴れる

までが大変です。来年はサ

ンケイホールで選暦の舞台

になります。一三夫氏の寄

席の句で私の知らない芸能

の世界を知りました」

▼堀江正朗・芳子夫妻(島

根県)の「川柳で築く家庭

愛」が写真入りの大々的な

記事で、島根新聞に掲載さ

れた。失明の夫と病弱の妻

が川柳に励み、三人の子供

さん達も川柳になじんで明

る生活を送っておられる

模様を紹介したもので誠に

心温まる思いをさせられた

宅への外泊許可を得られる程、順調に快復しておられる。一日も早い退院をお祈り申し上げる。

▼三井酔夢さん(香川県)は三井外科病院の主婦として極めて多忙の日々を送っておられるが、余暇に川柳だけでなく随筆をもものしておられ、この程NHKのFMサロンに「春の騒音」「暴力」などの作品が次々に放送されて、好評を博された。

▼不二田一三夫氏の末娘薄子さんが七月三日女兒分鏡親子と命名。



若本多久志著  
川柳句集「老いの坂」  
序文・中島生々庵主幹・  
お申込みは川柳塔社出版部へ  
B6版 美本 実費 450円・送料 95円

# 川柳塔本社路郎忌句会

七月九日 一 会場 自安寺 一

挨拶

中島生々庵

歳月の流れの速さに驚きながら、本日茲に路郎先生ご逝去後滿二年を迎えました。「昨年第一回路郎忌を営みました時も申し上げましたが、相去るものに疎しという言葉とは逆が、一日一日先生との時間は離れてゆきますが、先生に対するいろいろの思い出、慕情というものは一層色濃く湧いて参ります。それと同時に先生の足跡が如何に大きかったか、柳人としてばかりでなく、人間路郎としてもいよいよはつきり浮き彫りされてくるのであります。勿論ご生存中といえども先生の偉大さには力強く惹かれておりました。日々が余りに身近かであったせいも、その深さ、厚さ、広さ、即ちほんとうの先生のお姿を把握する事が充分でなかつた感があるのです。先生は自分というものの内面的つきかさね、即ち内面的充実に主眼をおかれた人生行路であつて、仕事や能力を世間の上に押し立ててマスコミに便乗しようとして、時勢に迎合してジャーナリズムにおもねつたりする事を、極めて厳しくお嫌いになりました。生涯を終られたのであります。それがご逝去

後、あちらから、こちらからと雲の湧くように先生の遺影をとりまき、迫つて来つたものであります。

一つの個人であらうと、大きな団体であらうと同様であるが、或る企て、或る事業を立派に完成することをもって、その個人、或は団体は成功したと申します。この成功ということに就て、笠信太郎氏はこう言っています。「私どもは、タカの知れた小さな山の頂上を目指して、人を押しのけても登りたがるものです。しかし、外よりは内を大切に考え、そしてやたらに人の上へ、上へと考えず、むしろ自分のほんとうの心を守るに如かずと考えることが出来るような人生態度に値打ちを感じるべきである。即ち仕事は何であらうと人生のあり方を出来る限り内側にむけかえ、その内側の奥に価値の標準を置き、それへの達成のために精進することこそ、人間としての成功であらうと思う」というのです。中略 私は本日路郎忌を迎えるに当りまして、先生が、たえず私達を戒めてお訓しになつた通り「附けやきば」でない「いのちある句」へ一筋道をまっしぐらに突き進んで参りたいと

誓をあらたにするものであります。

★

雨がはげしい。だが師をしのぶ柳人は百名という盛会である。時間は予定どおりプログラムを追っていく。

自安寺のお上人の読経にセキ一つ聞えぬ厳肅さ。柳粹院積路郎に合掌。葭乃先生と生々庵主幹が遺影の前に立たれたときは一瞬水を打つたような静けさだった。

松本の石曾根民郎氏、竹原市の不朽、蘭幸氏、島根県の明朗、正朗、清泉氏、岡山県の文平氏、松江市の祥月氏、東京都の満秋氏、篠山の与志氏、川柳文学の塊人氏、せんばの宣介氏、平安川柳の入仙、寛哉氏から番傘のおレキレキをはじめ各柳社からぞくぞく友情ご出席をたまわつた。

葭乃先生からのお供養を全員に。多久志氏の開会の辞、栞氏の名司会、故梅里氏に代わつて柳宏子氏の閉会のことばがおわる。第二会場の喜楽別館大広間で晩餐会の幕あきである。六十柳人交歓の二時間は各人のかくし芸とあすの川柳への夢がいっぱいだった。(河井庸佑整理)

出席―不朽・蘭幸・白柳・柳宏子・清泉・正朗・明朗・与呂志・栞・いさむ・一栄・伊三郎・静姿・貞山・好郎・白溪子・季賛・万の・東雲楼・民郎・静馬・入仙・宣介・文平・遊仙・柳志・潮花・史郎・聡一・春巳・塊人・水客・烏莊・操子・メ女・武助・旅風・寛哉・言也・汐食子・春果・祥月・金三・文秋・たつみ・清人・野迷路・トメ子・六童子

・阿茶・一舟・双楽・痴亭・葉平・多久志・  
 具吉郎・生長・富久一・醉升・舟遊・奈良子・  
 ・章雅・与志・吸江・小松園・形水・花梢・  
 ・一三夫・古方・夢草・恒明・笑痴・以兆・梅  
 志・霞乃・すゝむ・太路・惠文・観岳・勝晴  
 ・芳川・満秋・薫風・滋雀・雀踊子・狂二・  
 多蘭子・生々庵・美房・照一・あいき・弓彦  
 ・宏子・鉄児・水舟・史好・加仙・千梢・芙  
 巳代・葉子

席題「涼み船」

石曾根民郎選

涼み船から工場の灯が明かい  
 涼み船明日の生活も夢も乗る  
 涼み船出る頃酔いがまわってき  
 涼み船昔よかった橋がなし  
 涼み船橋の上からけなるがり  
 不渡りがどうのこうのと涼み船  
 汐の香をグツと吸い込む涼み船  
 涼み船ビールをさかかに涼み船  
 捕りたての鮎をさかかに涼み船  
 商談がやっとまとまり涼み船  
 ふところがピンチと見えぬ涼み船  
 涼み船風邪をもらってきた浴衣  
 舟べりの恋はしぶきも又楽し  
 街の灯を火花はうばう涼み船  
 もう逢わぬちとはなった涼み船  
 涼み船レディーファーストラ顔  
 涼み舟思わぬ人の肩がふれ  
 たいくつなのが足つけて涼み船  
 酔い覚めの浴衣が寒い涼み船

蘭 幸  
 与 呂 志  
 聡 一  
 宣 介  
 小 松 園  
 静 朽  
 不 朽  
 い さ む  
 正 朗  
 好 郎  
 恒 明  
 花 梢  
 笑 痴  
 潮 花  
 明 朗  
 文 平  
 小 松 園  
 芳 川  
 入 仙  
 形 水

涼み舟出してお忍びらしい影  
 むかし女ありけり涼み船  
 団体の宿抜け出した涼み船  
 船頭が一人を残す涼み船  
 涼み船気になることを聞いている  
 涼み船ほたるの夢を驚かせ  
 涼み船ゆかたばかりの客を乗せ  
 一家ケン族仮装している涼み船  
 涼み船ビールいささか冷めたすぎ  
 宿の灯を美しく見る涼み船  
 涼み船子供をおいて来たを悔い  
 涼み船いらいラジオでナイター聞く  
 おもかげを求めてみたい涼み船  
 お互いに過去を持つてる涼み船  
 老夫婦息子が送る涼み船  
 涼み船こは野望をおしかくし

席題「すべりんこ」

岡橋宣介選

孫も仲間入りしてるすべりんこ  
 俺の子が割り込んですべりんこ  
 すべりんこ斜めの風に笑い声  
 すべりんこ母が見るまでこららない  
 入り台小さい権利主張する  
 すべりんこ子の順番が狂わない  
 すべりんこ独り仁れて飽きもせず  
 すべりんこパパのカメラが追っ  
 親の方がもう疲れてるすべりんこ  
 泣き顔が笑いに変るすべりんこ  
 すべりんこママもどき駄をこね  
 得意気にママを見下すすべりんこ  
 すべりんこ貧しい政治ではあれど

武 助  
 水 客  
 清 人  
 明 朗  
 水 客  
 柳 志  
 た つ み  
 梅 志  
 静 馬  
 富 久 一  
 春 巢  
 清 人  
 水 舟  
 寛 哉  
 金 三  
 民 郎  
 祥 月  
 春 巳  
 笑 痴  
 水 客  
 多 久 志  
 文 平  
 柳 宏 子  
 好 郎  
 正 朗  
 痴 亭  
 静 馬  
 寛 哉

すべりんこ団地の子らは物足らず  
 すべる前に母に手を振るすべりんこ  
 砂走り富士の大きなすべりんこ  
 すべりんこ幼稚園のはこわくなし  
 ベランダに置くすべりんこ頼りも  
 すべりんこ背の子供が降りたがり  
 ママある日でれくさすすべりんこ  
 別荘に子供が居ないすべりんこ  
 ママの手が下で待てるすべりんこ  
 すべりんこあと一回で帰るうよ  
 親子もいっしょにこるすべりんこ  
 五階から声がとどいたすべりんこ  
 すべりんこ都会の子供あわてない  
 すべりんこ台下行くのがボスらしい  
 すべりんこ猫は中途で引き返えし  
 鍵っ子の頭の中のすべりんこ台  
 すべりんこ澄んだ瞳が後に待ち  
 すべりんこ檻の猿かながめられ  
 ちんぴらがさかま上るすべりんこ  
 すべりんこ四十五度は雲の上

席題「人類」

堀口塊人選

核兵器もう人類の行き詰まり  
 人類が蟻にも似るか放射能  
 人類の明日は宇宙へはみ出した  
 人類の夢は気になる灰が降り  
 モンキーダンスの先祖は猿らしい  
 人類史女それぞれ乳房あり  
 チンパンジー今人類のポーズとる  
 万物の霊長やっぱり殺し合い  
 ヒフの色だけで人類差別され

明 朗  
 万 的  
 白 柳  
 白 柳  
 い さ む  
 白 溪 子  
 言 也  
 形 水  
 秋 風  
 入 仙  
 旅 風  
 吸 江  
 芳 川  
 清 人  
 生 々 庵  
 文 平  
 静 歩  
 塊 人  
 塊 人  
 宣 介  
 以 兆  
 清 泉  
 柳 宏 子  
 柳 志  
 あ い き  
 葉 平  
 静 歩  
 好 郎  
 た つ み

人類史地球は着いものと知り  
 人類は悲しきものよ考古学  
 人類へ青空までがおびえ出し  
 人間の知恵で人類亡びかけ  
 人類のつなぐべき手に武器をもち  
 人類の祖先がノミをとっている  
 人類へ地球は狭くなるばかり  
 人類に親近感を持った猿  
 人類を敵に回わして蠅は殖え  
 人類にされて南の島に生き  
 進化論なる程俺にも尾底骨  
 人類という特権の嘘をつき  
 よそよそしう人類などというて  
 白黒へ神の教えもままならず  
 人類はかくして亡び砂砂砂  
 人類にしてセックスにある意見  
 人類の不安が貯めることを知り  
 人類の悲喜ことも子が産まれ  
 人類の粹ギリギリの高利貸し  
 人類も一組残すノアの船  
 人類が朝から酒に酔っぱらい  
 母があり人類をまだ信じよう  
 人類としての私は腹がへり

兼題「行末」

川村好郎選

行末は恩給のたりのたらかな  
 行末を云うて女は不貞腐れ  
 行末のことより今日の野菜の値  
 子の意志に委せ行末ちとわびし  
 行末は一緒さ雲と語らんか  
 行末を期待してたが蛙の子

葉平 柳志 水舟 春巢 阿茶 雀踊子 蘭幸 白柳 あいき 弓彦 多志 潮花 古方 狂二 葉平 入仙 白溪子 文平 野迷路 太路 勝晴 寛哉 人塊

バラ色に咲いて行末に触れさせず  
 行く末へがめつく貯めて置いと近き  
 あきらめてしまえば行末亦楽し  
 真直ぐか迷路か行末どちちゆく  
 行末もおもわが家の釜ヶ崎  
 行末をケセラセラとも云うとれず  
 行末を風にまかせた風媒花  
 行末は見返してやる意地を持ち  
 行末にちよっぴりふれて仲居酌ぐ  
 行末がどうのこうのと飲んでいる  
 待つというその行末を信じきり  
 祖母の行末安楽なお念仏  
 行末を語る手が触れ肩が触れ  
 行末を保険屋風情に案ぜられ  
 行末を額のおやじに監視され  
 行末を頼る子の無いままに老い  
 行末を云い出しゃ夫だまり込み  
 ゴーゴーのリズム行末など考えず  
 行末を托した旦那さん急死  
 行末はともかく今日を根かきり  
 行末は行末離婚すると決め  
 行末をふと養老院に置いてみる  
 行末を頼んだ梅里先に逝き

兼題「だしぬけ」

菊沢小松園選

だしぬけに来て会らる寄附せよの  
 だしぬけに女はぶいと席を立ち  
 うたたね眼だしぬけキスシーン  
 だしぬけに目覚しいらん時に鳴り  
 だしぬけに帰り田植えを喜ばし

小松園 葛城 齋花 阿舟 寛哉 芙巳代 芙巳代 金三 水客 静歩 奈良子 加仙 小松園 笑痴 静馬 言也 一舟 葉児 鉄児 すむ 入仙 弓彦 好郎

だしぬけに握手をされた人違  
 不意の客夫婦喧嘩の火消役  
 だしぬけに会いたいと過去の人  
 だしぬけに開いたドアで鉢合わせ  
 だしぬけの客は麦茶であしらわれ  
 だしぬけにお金の無理が云える仲  
 だしぬけでピストルおもて気さか  
 だしぬけに心をかえた平手打ち  
 だしぬけの監査書類が見つからず  
 だしぬけの涙おんなに策がなし  
 だしぬけに来てお隣りで世話に  
 だしぬけに身をひくすべを女知る  
 返盃の手をだしぬけに握られる  
 だしぬけで車の番号覚えてず  
 だしぬけにきたお見舞い喜こばれ  
 だしぬけの話と相手は思とらず  
 だしぬけにあけた襖の目をそらし  
 だしぬけに女が訪ねて来た下宿  
 とまどいもいそいそとプロポーズ  
 だしぬけに来て遠慮を飲んで去に  
 だしぬけに盃が来た久しぶり  
 だしぬけに大声あげた忘れもの  
 だしぬけに寄る非礼をよるこばれ  
 だしぬけで返事に困るいい話  
 だしぬけと云う手も集金やって見  
 だしぬけの客ヘカレーは薄められ  
 だしぬけにムードをアドアア  
 だしぬけの客日曜をかきまわし  
 だしぬけの告白女に遅すぎず  
 だしぬけに来る身内というゆとり

千夏 湖平 芳朗 痴亭 芙巳代 聡一 阿茶 水客 六電子 寛哉 阿茶 水客 潮花 野迷路 夢草 与呂志 入仙 鉄児 章路 雅 采江 吸風 旅秋 文秋 恒明 六電子 潮彦 舟遊 清人

だしぬけに女は死んでくれと云う

兼題「枕」

北川春果選

嫁ぐ気になつても枕はね飛ばし  
枕辺にみんな来たか死をさると  
浮気する方がよからつた水枕  
むつまじく枕の刺繻もそろいにし  
寝ころべば丸い枕の膝があり  
枕の下も手品のように貸してくれ  
反省をするとき枕濡れてくる  
ひじかけへ空気枕の長い旅  
春病の枕の高さにも気を遣い  
うたた寝の枕のままの朝となり  
草枕空のひろさよ人生よ  
里帰り戻らず枕けつとばし  
枕元さびしくなつて回復期  
枕蚊帳のぞいて飽きぬ子煩悩  
安全運転枕をつけて気を休め  
枕すかして遠雷をききかける  
子の枕よい子に育つように置き  
手枕で子供叱つたマンガ読む  
欲望はレモンのような膝枕  
不治と知る枕泣かして帰る客  
祭太鼓手枕で大きく旅の宿  
生きぬ仲この子は知らぬひざ枕  
今日の稼ぎ旅の枕の固きまま  
目覚しをとめて枕の位置をかえ  
母の夢見たさに枕裏返し  
座ぶとんを枕に朝まである話  
スモッグない空を見上げる草枕  
お婆ちゃん枕をだいて孫が来る

小松園 小松園 芳子 清人 好郎 千梢 文平 小松園 夢草 白柳 烏莊 生々庵 宏舟 一舟 静馬 痴亭 季贊 古方 文平 恒明 入仙 花梢 柳志 民郎 芙巳代 静水 好女郎

句集句誌枕頭台につんで病み  
手枕にいびきの高い酔心地  
行儀よく枕してる子でよう肥えず  
手枕の子の重たさが又も増え  
うらぶれを見せまい旅の枕抱く  
枕カバー真白妻がいてくれる  
座ぶとんを折つた枕でもてなされ  
ラグビーの夢見てるらし枕抱く  
故郷の枕にそばかすの音  
実印は枕の下でのれん無事  
枕元ズラリ遺産をねらう顔  
二等寝台の枕が性に合う若さ

兼題「聖書」

麻生霞乃選

痴亭 喜仙 八郎 柳宏子 水客 史好 一三夫 柳宏子 塊人 弓彦 多久志 春果

母子家庭聖書が父の役はたし  
聖書百読まだ程遠し神の声  
嫁ぐ娘と一とき母は聖書読む  
良心にふれる聖書に目をつむり  
バイブルが橋渡しして英会話  
半生はバイブル半生は阿弥陀經  
新約も旧約も覚えて無信仰  
絶安のベッド聖書にすがる日々  
子が出来て聖書は書架に忘れられ  
底辺にくらして聖書めくられる  
へそくりと知り聖書ははさんでた  
清貧に生きて聖書へ心足る  
回復期聖書が試歩の杖となり  
聖書持つ乙女の肌は地味な色  
バイブルを閉じて心にふたをする  
罪をまだ罪とも知らず聖書抱く  
聖書から明日の希望を探し出し

吸江 加仙 花梢 いさむ 一三夫 宏二 狂明 恒明 与呂志 醉升 多蘭志 多久志 花梢 塊人 好郎 史好 寛哉 章雅 乃

長野文庫著

川柳句集「しあわせ」

送料共 二五〇円

目次には自序・川柳・前句付・柳多留・古川柳・狂句・前田伍健句抄・文庫句集・川柳の旅など多彩。

発行所 愛媛県今治市港町八丁目

長野文庫



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

交通局川柳会(大阪市) 児島与呂志報

温泉へ来て若返りしたつもり  
安産の電話瞬間祖父になり  
給料日のない小遣いをどないしよう  
顔色を先に切り出す見舞い客  
鳥一ツ買ったと景気の良いはなし  
機械いじるコツを長男僕に聞く  
花便り故郷の母からもう来ない  
ボックスの蔭で野獣の甘い声  
馬鹿陽気安全地帯からあふれ  
年頃に育てて別居の準備をし  
手術する準備へ耳が聞こえずぎ  
聞くだけは野暮よと二人手をにぎり  
怠った準備に山は受けつけず  
妻といる横断歩道は青を待ち  
沈黙が破れた赤の横断路  
横断に人間だけを迂回させ  
苦笑い済んで良かつた横断路  
横断をするのを腕を組んだまま  
陸橋から見る横断路が地獄めく  
オシヤレした犬美人の胸に抱かれ  
犬に血統書みだらな恋させず  
人間の瞳を讀んで野良犬今日も無事

緑雨 春果 淡舟 酔勝 季舟 鉄舟 一乃舟 正則 漫多郎 茶坊 歌ー 呂人 継之助 桑のる 孤舟 喜酔 笑風 六竜子

こニヤクが小さい串に躍って来  
こんやくの白あえ母の味がしみ  
準備した小銭が足らぬ孫曾孫  
停年を心の準備してかかり  
さみしさは扶養家族がひとり減り

南大阪川柳会

金井文秋報

ステレオの音にも馴れた熱帯魚  
謎かけたまままで切られた電話口  
熱帯魚チンピラ斜に逃げ廻り  
道づれの刹那に叫ぶ子にひかれ  
開店を明日に控えた釘を打つ  
謎めいた言葉で女が保つ距離  
別れそうに別れぬ謎を知りたがり  
特急を抜く急行が気に入らざ  
そぐから何んでもないのに疑われ  
殊更に口に耳あて気をもませ  
香水の匂い急いできた見舞  
用意した文句一言も出ず別れ  
一言もいわずその目の愛たしか  
ベテランの腕に託した納期前  
特別情報またかと思う週刊誌  
勘定を急がれ銚子の数ちがえ  
妻づれのそれから美しい誤解  
妻の眼に言いたい言葉ひかえとく  
倅せの道づれにしたしと神父説き  
旅のスリルちよっぴり期待ハント  
解けぬ謎とくまい空が美し婦  
一と言で用事の足りる老夫婦  
因縁があったんやなと共白髪  
待っていた一言裏目に出る話  
惚れてると一言いわせ嬉しが  
父ちゃんの謎母ちゃんよく見抜  
道路舗装いそぐ訳あり立候補  
謎かけて嫁の押売り叔父が来る

麦二 誓児 鉄巢 雅果 与呂志 痴笑 柳志 金三 梅里 文秋 一舟 照彦 静馬 花梢 あいき 滑雀 滋江 吸菜 双楽 水松 小園 柳宏 柳客 遊雅 古仙 白方 竹柳 季荘 痴亭 宣介

ごめんねという一言を親は待ち  
おさきに帰りを急ぐ共かせぎ  
謎とけてその気になった月の涙  
いそいで出る指がしら挨拶ご丁寧  
熱帯魚不快指数を知らぬげに  
謎を説くような手振り花を活け  
特別な親切妻の気に入らず  
急ぐのに足ですねてる赤電話  
熱帯魚三寒四温に気を配り

五造川柳会(大阪市)

西出一栄報

下ッ端の虚勢が世間の目に余り  
落し物困るだろうと軒に吊り  
拾われて僕のと云えぬ落し物  
あまり大金で届ける気になつた  
落し物届けて大事な日をつぶし  
何処で落したのやと無理を云い  
円卓のムードよろしく席和む  
席上はほめられすぎた祝賀会  
席上で意見をしたで認められ  
即興が満座の人氣かつさら  
決算報告へ先に拍手を頼まれる

若本多久志著

川柳「親心」

実費 二百円  
送料 六五円

要望にこたえて謄写印刷で百部限定出版  
申込所 大阪市南区鯉谷仲之町二〇  
川柳塔社

「親心」係

金三 義介 照舟 一介 あいき 美房 貞山 双楽 寿美司 季賛 柳宏子 一栄

誤解いま解けて席上手の温み  
咳一つせぬ席上の善後策  
勉強の朱で古本の値を下げる  
へそくりの目印少し動いてる  
目印はあの塔どすと京言葉  
指定席デパートの服は赤と決め  
目印しの煙草屋まではすぐ判り  
賑やかに左遷のホームと子は知らず  
ビール一本こんな賑やかな父にする  
賑やかに祭太鼓は庭の賑やかさ  
叱る子があつて家庭の賑やかさ  
あくせくはすまい長生さするつもり  
足るを知るのんびりを君知るや  
のんびりしたいスターパスポート

備前川柳社句会

六童子 梅里 文秋 句念坊 章雅 静馬 静雀 井平 はじめ 古太 恭柳 清方 人

わんぱくの何故かそぐわぬ参観日  
買い物をついでに済ます参観日  
先生の顔もほころぶ参観日  
参観日に行つて東大あきらめり  
参観日教育ママはよくしゃべり  
お祭のように着て来た参観日  
参観日近づき美容院が混み  
参観日また手をあげる隣りの子  
うちの子の手があがらない参観日  
マネキンのようにずらりと参観日  
参観日自信のない手が宙に浮き  
お買物明日は参観日と答え

高知川柳社 (高知市) 川竹松風報

草人 童泉 水月 秋月 正風 一洲 柳声 柳子 飴子 久米雄

一坪の庭が欲しいという団地  
団地とは緑なき暮し灯がともり  
行政の遅れをなげく団地族  
団地又よし人情の機微に触れ  
衣食住みなライブルとなる団地  
広告を見てきた団地見てあきれ  
団地にも馴れて余生の老夫婦  
火と燃える女石にもなる女  
落書のようにも見える書道展  
針箱の底から母の手を見つけ  
父ちゃんの短気をかばう母でよし  
突風へ女は廻れ右をする  
遠い記憶に父の顔波の音  
移転して四五日眠い昼さがり

ウイロー社句会 (ハワイ) 快夢起報

観光の記念にガイドも入れて撮り  
宣伝を乗せて観光派手に着き  
観光地思い出せない人も撮り  
役得は官費で観光して帰り  
春四月観光団も花ざかり  
無理算段してまで観光妻が知れず  
観光も一人で二人亡妻連れて  
観光へ月の忙しい三日居り  
観光も枯れた松葉の二人連れ  
念十年変る祖国に目を射られ  
念願の母国観光目参兼ね  
買い足して観光の土産に合わせ  
観光団見送る俺の淋しけれ  
観光へかさばる孫への土産物  
観光不足は観光バスへ乗つただけ  
観光客水と空気をほめて去に  
観光も兼ねて村人見返す気

国鉄川柳会 藤原秋月報 久米雄

あき坊 浮草 三石 紅溪 蒼蛇 内海 エス 雪女 カロ茶 柳葉 紅茶 柳山 拜里 万里 泉歩 浅水 浅舟 快夢起

強情の執念何処まで追いかけて  
強情の気性を政治の中に見せ  
無駄と知る小言を喉の奥で消し  
舌つづみ母の乳房を信じきり  
小言だけ言うて意見はしてくれず  
善人の当りさわりのない小言  
好き嫌いな健康な舌つづみ  
美人への小言は将来性が少しづ  
年寄りの小言は語尾が少しづ  
上背と理屈だけを親に勝ち  
孫の口借りて小言を言い伝え  
小理屈が好きで思想に生きてゆき  
小言言う父の思独にもう古  
隣組理屈を言うて役がつき  
小言には馴れていますとガムを噛み

堺川柳会 (堺市) 和海草春報

照友路 胡秋 毅平 三郎 訓夫 草心 一坊 豊九 錦郎 太九郎 嘉郎

東京の孫を見に来た足袋の裏  
白い足袋器用にむけての阿波踊  
草春

茶 グリル・ラウンジ  
パーティ・ラウンジ  
展示会場

喫茶・グリル・ラウンジ  
**御門**  
G Y O M O N

心齋橋大丸・そごう東入  
TEL 271-6684



雅号ぶつちやげばなし (35)

よるし



児島与呂志

こじま

私の与呂志命名は、昭和二十七年十月十日川柳大阪の句会場で川柳塔同人である、福島正則浜畑胡蝶両氏の改名であり、北川春男部長富岡淡舟両氏「よろし」「よろし」と協賛がある。(旧好坊)名は体を表わすと言う言葉がある私はその通りだと思ふ。それに作句意欲を溢かせるのも雅号のも一つ一つの不思議だと思ふ。雅号には、「その人」「その人」の味があるものだから、余りにもピントはずれの流行にとらわれたような雅号には人ごとながら抵抗を感じる。よい雅号を得られるよう望みたい。よい雅号を持つ私はしあわせだと思ふ。最近歳のせい今迄のように「よろし」「よろし」と行かんで老けたかと思つて反省中であるどうぞよろしく。  
大阪市交通局員・四十五歳

玉子に目鼻へんてつもない妻を持ちオムレツの出来そこないは妻の皿殻になつても玉子植木に吸いとられ日本中玉子と海苔の宿の朝生みたての玉子のぬくみ掌に残り玉子さへ出せば機嫌のよい坊や政治家の厚顔玉子でもぶつきたし用意と待てばグテングテンで帰る来玉子もう生まずかしわと名が交りウデ玉子つまみ喰いして退院し玉子焼上手になつて院し箱住いだだ下向きに生む玉子合理的すぎて玄関せまくなり難は家鴨を解してびっくりしおぼろ月待つ身悲しく枯草蹴る幹事して待つ身のつらさ知らされる待てるわその一言についひかれ

太痴鬼吸芙幸草比雄眞千喜雪生啓重彌  
庸亭遊江代好子春路郎吉郎峯風歩長夫吉生

養鶏場臭いが玉子買いにゆき白柳  
ネクタイを解き解き覗く枕蚊帳梅  
人生待ったなし今年ももう青葉好郎  
まるべに川柳会(大阪市)川村好郎報  
叱られたらしい課長の当りよう茂児  
叱る身になつてもみよと又叱り其好  
金のことになると他人の顔になり立児  
条件が揃えば顔が気にかかり幸子  
本気で叱つては顔が読みみ泉子  
叱つてくれる人亡き孤独かみしめる風太  
叱つても棄て猫トボトボついて来美陸  
叱つてから寝顔見つめる子煩悩睦子  
叱るにも上手下手あり知性の差好郎  
叱つても父にはかくしてくる母好郎  
あすなる川柳会 故松江梅里報  
一泊の顔ぶれ妻は出し洩り好郎

要点をばかして肚の探りあい百酒  
持ち逃げのついでに女もつれて行きゆきを  
何をすのダイナマイトを持て逃げ慶之助  
市場籠豆腐一番上で揺れ素彦  
子の無理を訊いてやれたらなと思ふ梅里  
零一つ揉み消し懲戒免に思ふ

オーエスケー川柳会

大坂形水報

計画の一片づき煙草吸う博泉  
立飲みの店一日の汗ににおう一扇  
月賦屋の生活プランに巻き込まれ有  
工事場の汗汗汗の笑い声孝夫  
太陽へすなおに伸びる朝顔よ神成  
日まわりは太陽追うてゆく静寂亜  
僕の太陽ですなごとうのろけら田  
太陽に寝床を見せぬ母達者常  
プランだけ残り今年も過ぎてゆき形  
太陽が追いかけてくる冷房車入  
入夢

いなほ会

(出雲市)久家代仕男報

飲み代を月賦に回し肩を組み登志緒  
肩で風切つて月賦の服が来る斉兆  
やり繰りが妻が内助の月賦代を家  
新婚のプラン月賦も入れて立てぬる  
自家用車あれも月賦と負け惜しみ芝朗  
同窓が次々に消え年を知り信洲  
同窓の出世頭は床に据え嘉藤  
同窓の顔を合せた保育園北山  
同窓の顔の型で同窓生帯じみひよこ  
同窓のよしみ選挙に利用され保男  
同窓の茶目氣恩師の眼に残り春軒  
同窓の墓参が親を悲しませ代仕男

川柳たけはら

山内静水報

まな板に母の鼻唄聞えて来洋子

お父さん夢の中でも仕事をし  
 屋敷する父ちゃんの鼻つまんでみ  
 屋敷する母やつれてる顔に見え  
 恋人が出来て兄ちゃんらしくなり  
 兄画表どりに屋敷の試験中  
 兄弟喧嘩思いつきさせる雲が飛ぶ  
 母の日に父がつくった目玉焼  
 以上中・高・学生

貧しさにくじけぬ父の力こぶ  
 父帰る海辺に浜の子ははしやぎ  
 せめてもの慰め父がいてくれる  
 父となる朝へやっぱり落ちてくれ  
 その上に父の日など有難し  
 屋敷しておくと夜釣を誘いに来  
 夜勤です屋敷びたり戸を閉める  
 スタンドをいづわりのない口笛が  
 童べ唄うたえるボクがもう一人  
 蠅一匹大事な膳につきまとい  
 エリートへ同情うすきせちがらさ  
 感謝状心に重く重く受け  
 父の日のチャネルせて父にあげ  
 人みんな信じ切ってるコケシの目  
 暴力団そんな名前もある日本  
 骨休め三日天下の風邪を寝る  
 女心つかめないから面白し  
 父親がいたらと思う式を挙げ  
 生きてれば何んとかなる子が二人  
 寝起きのよい尻でじっとしておらず  
 浮気でもしなさい三子の母強し  
 切符握って故郷は近くなり  
 まばたきもせず酔顔を兎が見つめ  
 生活を互にけんせいする団地  
 菖蒲湯の匂いの中にある童話  
 屋敷寺たまには違う顔も見え  
 父ちゃんの屋敷作業衣のまんま

紀美子 幹夫 勝彦 宏子 松久 静美 久美枝  
 無門 紫水 鬼焼 静水 柳漁 否尾 文平 清太郎 松風 松石庵  
 扇文 一不 蘭泉 巨泉 峰幸 静志 静居 波舟 志泉 静居 波舟 志泉  
 澄凡 不春 青静 静静 峰巨 蘭泉 巨泉 峰幸 静志 静居 波舟 志泉  
 恵女 朽昇 居波 舟志 泉泉 幸路 晴水 石庵 松風 松石庵

セールスは屋敷起した事を詫び  
 父だまるから家中みなだまり  
 三十年逝きし日のまま父若し  
 すぐ赤くなる父ちゃんに酌いであげ  
 明けらの執念キズついでも動き  
 明日試験今夜はぐっすり眠りませ  
 基を囲む夫子へはずり針仕事  
 家庭の日子供の願ひ聞いてやり  
 祖母だけを残して一家の衣更え  
 ちっぽけな野心だから放つとけず  
 どうしようもない人だから放つとけず  
 退院の日から主婦にはある仕事  
 武器がない僕だよ小さくちぢこまり

ふじかけ短詩陸会 藤本礎山報

モンペの娘あぐらかいても美しい  
 好きだから美人でないがかばい出し  
 十八の姉の美人がわかり出し  
 美しい人へ言うこと間違えた  
 美しい子が来ておつり間違えた  
 皮だけをむいてお寿司屋おどらせる  
 コンパクトはたく母ちゃん美しい  
 メロン切る方法寝ている母に聞く  
 二食主義より美しく成り度い気  
 ケツタイな帽子が美人によく似合い  
 夕焼けへ美少女が佇ち僕が佇ち  
 親像の様に美少女店に座し  
 似に似ぬ美人だなんて許せない  
 生きたまま切られる鯉がかわいそう  
 以上小・中学生

行楽へ撮りたい美人追けてゆき  
 美人過ぎないわと言う美人なり  
 恋人は居ないわと言う美人なり  
 失恋に哭いたって過去の愛慕う  
 屋敷の湯へひたつて過去の愛慕う

房美子 マスエ 晴美 延子 輝子 清子 よし恵 操子 三枝 政己  
 民野子 梅き 喬彦 敏彦 コッコ アッコ 敬夫 二朗 和宏 カッチン 生子 富長 総長 富男子 富夫

宴会・折詰・出張パーティ

# 大 萬

阿倍野区松崎町  
 TEL ☎ 5031・5032  
 南区墨屋町三ツ寺センター  
 TEL ☎ 9184

耳許へ美人の息とささやきと  
 美人だと言われただけでも足らず  
 イラでケチそれでも女将美しい  
 偶然と言う名の出逢い倅を呼び  
 美人なり代々嗣いだ鼻の筋  
 斬る方の子供の口がひんまがり  
 愛情を代々ついで澄む瞳  
 娘も水着母も水着で美しい  
 美人には美人の苦勞つきまとい  
 口紅を美人の方がつけてない  
 妻だろか娘だろかとかしまし  
 うかつなり美人の娘の恋他所で聞き  
 たかが鼻整形美人になるものか  
 稚ない娘あくび可愛い美しい  
 素晴らしい美人になるだろ成れ妹  
 美しいリリス美人に斬りとられ  
 魚市場勝ち気な美寡婦せり上げる  
 人間の弱さ美人へ妬けている  
 ▼友淵貴山氏(大阪府同人) 夫人ふく刀自が  
 七月七日逝去された。謹悼。

• 2 D K •

★送本をすませて、八月号にかかろうとしたとたん副理事長松江梅里氏急逝の悲報だ。前号で予告した特集「戦争と川柳」は粒ぞろいの原稿だったが、梅里氏の追悼号に切りかえたため全部発表できなかった。それと、岡橋宣介先生が追悼原稿をくださったが、締切後に拝受したので残念ながら次号へまわさせていたのだ。ともにおわび申し上げます。

★暑中広告へご協力、厚くお礼申しあげます。

★先月は路郎忌句会と梅里追悼句会があった。本社会を二つ催したことはめずらしいことである。

☆朝日新聞の、「日本の年輪」に「川柳」が出た。七月十六日付。東京本社から電話でよくに会いたいという。漫才関係ではないのに驚いた。豆秋氏の遺書と梅里氏最後の柳話が掲載された。(不二田一三夫)

十月号 発表 (8月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選  
近作柳樽 (10句) 北川 春巢選

課題吟 (各題5句以内)

「電話帳」 横山 一声選  
「司 会」 野村 味平選  
「ペ ッ ト」 石川 侃流洞選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十一月号 発表 (9月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選  
近作柳樽 (10句) 川村 好郎選

課題吟 (各題5句以内)

「文 化」 石坂 新雪選  
「好 意」 那谷 光郎選  
「プ ロ ー チ」 新川 博也選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください

本社八月句会

念記出版「の坂の古い集」兼題  
多志久 兼題  
会費 百五十円

日時 八月七日(月) 午後六時  
会場 自安寺(妙見さん)  
市電千日前下車スグ北側  
(電話211・1478番)

★投句だけの方は切手50円封入

柳 話  
「ゴシ ッ プ」  
「水 頭」  
「型 破 り」  
三題(題と選者は当日発表) 各題三句  
百五十円

清 水 白  
河 相 すゝむ  
菊 田 いさむ  
福 島 鉄 児  
若 本 多 久 志

柳 選  
柳 選  
柳 選  
柳 選  
柳 選

★電話での投句や訂正は遠慮願います  
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社  
電話 大阪 04 3985番

9月の兼題 「学 歴」 「蒸 発」  
「マニア」 「腹」

定価 百二十円 (送料八円)

半年分 七百五十円 (送料 巻  
一年分 千四百四十円 (送料負担)

昭和四十二年七月二十五日印刷  
昭和四十二年八月 一 日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地  
編集兼 発行人 中 島 蓬 太 郎  
印刷所 大陽印刷株式会社  
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地  
発行所 川 柳 塔 社

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた  
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)  
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇  
る  
海  
岸  
美  
を  
風  
光  
明  
媚  
な

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

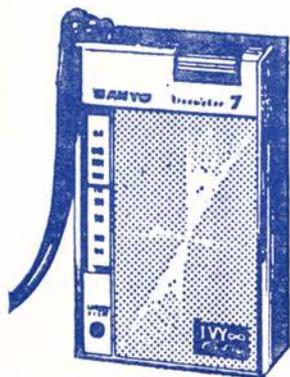
広東料理・焼餃子

豚饅 蓬策 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋  
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー



〈カドニカ電池〉

## 永久電池内蔵

7C-615型(7石1バンド)

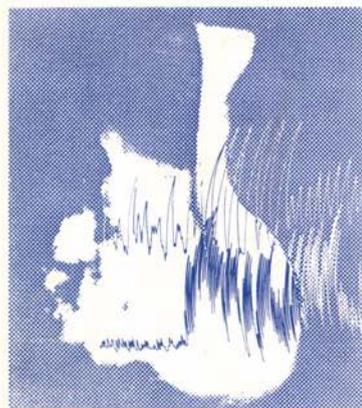
現金正価 5,400円

6回正価 5,670円



# サントリーカドニカ

三洋電機株式会社



### 胃炎、胃下垂症の特異的療法！ 消化管の生理的律動調整

消化器機能異常治療剤

## プリペラン

錠／細粒  
注／シロップ

■消化管運動機能を本来の生理的状态に保ち、特に運動失調に伴う、もたれ感、膨満感、悪心、嘔吐などの消化器症状を速やかに取り除きます。

■強力な制吐効果を有します。

■作用は消化管に極めて選択的で安全性も高く、安心して投与できます。

- ・慢性胃炎、胃下垂症などに1日6T又は1.5gを
- ・術後の悪心、嘔吐、腸管麻痺に1日1～2Aを
- ・小児の嘔吐、食思不振に1日10～15mlを

健保適用

錠 1T 11.90 注 1A 66.00 シロップ 1ml 4.90



**藤沢薬品** 大阪市東区道修町4丁目3  
(東京・名古屋・広島・福岡・札幌)